Osaka University Knowledge Archive

Title	弔辞　哲学論叢　第16号
Author(s)	
Citation	哲学論叢. 1985, 16, p. 1-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66830
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

第一部

弔　辞

高橋昭二さん

謹んでご霊前にお別れのことばを申し述べます。

あなたは昭和二十六年、京都大学をご卒業ののち、助手として大阪大学文学部に着任され、その後講師、助教授を経て、昭和四十五年からは教授として哲学哲学史第二講座を担当し、今日まで三十三年になんなんとする長い間、大阪大学文学部において孜々としてドイツ観念論哲学の研究に専念して、偉大な業績をあげられるとともに、情熱をこめて後進の育成にあたり、幾多の俊秀を世に送り出されました。さらにこの間、評議員、またかずかずの重要な学内委員を歴任して、大学の管理運営の面においても、多大の貢献を果されました。

そのあなたが突如として病魔の犯すところとなり、大阪大学附属病院の先生方のご努力、ご家族の懸命のご看護も空しく、若きヘーゲルに関する大作の業なかばにして、また講座の将来、後輩の行末にも心を残しつつ、ここに他界されましたことは、まことに痛惜のきわみであります。

私はあなたと三十有余年の間、同僚として親しくつきあってまいりましたが、一人間としての操と、一哲学者としての志を、終始一貫、凛乎としてつらぬき通されたあなたの生き方は、私にとってつねに貴重な教

訓であり、はげましでありました。

あなたが二度目の手術、開頭手術を受けられたあと間もなく、阪大病院へお見舞に立ちよったとき、病室のベットの上にあぐらをかいてカントの原書を読みふけっておられたあなたの姿を、私は生涯忘れることができません。晩年のあなたは、自分を犯しつつある病気の正体をしかと見すえつつ、残された時間と闘いながら、自己の哲学の完成のために、体力、気力のすべてをふりしぼられました。そしてあたかも燃えつきるように、静かに去って行かれたのであります。

ここに謹んでご霊前に哀悼のことばを申し述べ、あわせてご生前のかずかずのご業績に感謝をささげ、あなたの学者としてのみごとな生き方をしのびつつ、お別れいたします。

安らかにお眠り下さい。

昭和五十九年二月二十日

大阪大学文学部長
片山良展
（大阪大学文学部教授）

弔　辞

高橋さん。貴方への弔辞を読むようなことになろうとは、まことに思いもかけぬことでした。昭和二十三年一緒に京大哲学科に入学して知り合って以来同じくカントの哲学を研究しながら長いおつき合いを頂きましたが、今こうしてお別れしなければなりません。思えばその間貴方はいつも冷静でありながら人の心に対する温い思いやりをもち、公正な判断を失わぬ畏敬すべき友人でした。大学卒業後はたがいに西と東に別れて住むことになりましたが、お会いする度にいつも心を開いて話合って下さり、貴方とお話できることは、私にとって関西を訪れる楽しみの一つでもありました。

今から十年前カントの生誕二五〇年記念の学会を機会に日本カント協会を作ろうという声が起ったとき貴方は積極的に御尽力下さり、協会発足後は常に常任委員として、御多忙中労を厭わず度々上京して協会の運営に御努力下さいました。協会も今年で発足以来九年目を迎えますが、貴方の事誼を得た御提案、公正な御判断なくしては、協会がここまで存続発展することは不可能だったでしょう。貴方と浜田さんと三人で協会の運営について御相談したこと、その後ウィスキイを飲みながら談論風発、哲学や学界の状況などについて論じ合ったのも返らぬ懐かしい想出です。

昨年の八月私は貴方から一通のお葉書を頂いて沈痛な想いに襲われました。貴方が肺癌のため右肺切除の

手術を受けてやっと退院し歩行と呼吸の訓練をしていると書いておられたからです。貴方は淡々とした筆致で書いておられましたが、その背後にはひとりで戦っている苦しみがあるのを感じました。慰さめの手紙の書きようもなく過ごしている内に、今度は脳腫瘍のため手術する、「癌の転移がこれほど早いものとは思わなかった」というお葉書を頂きました。ほんの二、三日前に頂いた貴方の最後の御著書の「はしがき」と「あとがき」に、改めてその頃の貴方の御心境を辿りましたが、貴方の苦しみを感ずると同時に、「仕事を続ける以外に生きるすべはもはやない」と最後まで哲学者らしく生きようとした貴方に改めて畏敬の念を感じました。

昨年十一月二十日、日本カント協会はお茶の水女子大学で第八回の学会を開きました。研究発表の合間に会員控室に入った私は、そこに丸坊主になった貴方がいるのに驚きました。貴方は「やっと退院できたので……」とにこやかに言いました。私も表面平静に冗談をいったりして応対しましたが、内心おそらく最後のお別れのつもりで学会に出てきてくれた貴方の御気持を痛いほど感じていました。貴方は委員会が終るとまもなく姿を消しましたが、それが貴方にお会いした最後でした。

高橋さん。いろいろ述べればきりがありません。最後に貴方とお別れするに当り、これまでの御友誼を感謝すると共に、日本カント協会を代表して改めて貴方の御尽力に謝意を表したいと思います。そして今後も貴方のお気持ちを無にすることのないよう、協会発展のため努力することを誓いたいと思います。どうか安らかにお眠り下さい。

昭和五十九年二月二十日

日本カント協会代表
門　脇　卓　爾
（学習院大学文学部教授）

弔　辞

高橋君、人間はいつかは別れねばならないものでありましょうが、それがこのように早く訪ずれてこようとは夢にも思いませんでした。現代の医学をもってしても如何ともし難いガンという病魔のなせる業とは知りながら、残された我々同僚友人としては、ただ残念というほかありません。

思えばこの病気におかされたと知ったのちの君の生き方には、我々にとってまことに驚嘆すべきものがありました。君は自分の病気をまるで他人事であるかのように客観的にみつめられ、見舞いに行く我々に事もなげに細かに説明されるのです。それは聞くものの方がかえってうろたえ胸が痛くなるほどの落着いた冷静な話しぶりであり、態度でありました。そこには既にガンという病いを超越してしまった諦念あるいは悟り

と言ってよいようなものさえうかがわれました。しかも病いとの戦いと同時に君は、余命が幾許もないと知って残された時間をあげて君のこれまでの仕事をまとめることにそそがれ、『カントとヘーゲル』『若きヘーゲルにおける媒介の思想(上)』という二冊の書物の形で世に問われたのでした。君の死の数日前にでき上ったこの二冊の書物を胸にかかえて、君は今頃、天国への道を恐らく満足げに歩んでおられるのではないでしょうか。

君は尊敬してやまなかった恩師伊達先生を早くに見送っておられます。また最愛の弟子の一人である尾崎正彦助手を同じガンという病いで失っておられます。尾崎助手に対する君のまことに手厚い看病ぶりは友人の間で後々までも語り草になるほどの感動的なものでありました。これらの経験から君には自分の病いに対してもおのずから覚悟されるところがあって、それがあの沈着にして冷静な病魔への対処の仕方になって現れたのではないでしょうか。しかし君の心の中では、他人には到底うかがい知ることのできない激しくきびしい病いとの戦い、死との対決があったことと思います。君は病床で「頑張ります。頑張ってできるだけ生きます」と言っておられました。再度にわたる大手術にもたえて本当によく頑張られました。本当に壮絶なガンとの戦いぶりだったと思います。

思い起せばこの三十数年の間、様々のことがありました。大学紛争のときの君の活躍ぶり。それは君の持つ秘められた才能をいかんなく人々に印象づけた実に見事なものでありました。また日頃の研究室、教室、あるいは教授会の席上などでの責任感にあふれた誠実なお仕事ぶりも誰しもの認めるところでありました。これらのことについては私がとりたてて詳しく言う必要はないと思います。ただ言っておきたいことは、学問と学生とに対する君の溢れる愛こそが、君の行動を常に支えてきたものであった、ということであります。

君の薫陶の下に、君の講座から多くの人材が巣立ってゆきました。この点について君の心に残ることは何もないと思います。君に心残りがあるとすれば、それは恐らく研究の面においてでありましょう。そのことは君自身が、君の最後の著書『若きヘーゲルにおける媒介の思想』を、下巻が遂に出ることがないであろうことを知りつつ、敢て上巻と名づけ、そのことによってこの研究を未完成のものとして公けに示されたことの内にうかがうことができます。今少しの時間の余裕があれば完成にこぎつけ得たのに……と君もさぞ無念であろうと思います。

しかし高橋君、我々の哲学という学問はプラトンの昔から、本来、いつまでも未完成、未完結の学問であります。君はヘーゲル研究を未完成の姿に残すことによって、これからもどこまでも哲学をつづけて行こうとする意志を示されました。そこには学問への強く激しいパトスがうかがわれます。それは同じ学問にすすむすべての者にこの上ない励ましとなるものでありましょう。

本当にいろいろと有難うございました。暫く先に休んでいて下さい。さようなら高橋君。

以上簡単ですが、別れの言葉とさせていただきます。

昭和五十九年二月二十日

哲学研究室代表
三　輪　　正
（大阪大学文学部教授）

弔辞

高橋先生、この一年間の御闘病、本当にお辛かったことでしょう。しかし、先生はあきれるほど冷静に、穏やかに、逞しく、この死に至る病に対し闘ってこられました。考えてみますと、先生がこのように強く生きてこられたのはこの一年間だけではありませんでした。大阪大学に赴任されて三十数年、先代の伊達先生の後を引き継がれてからでも、十六年、歴史の浅い哲学研究室のために自らを捧げ尽して下さいました。何でもかでも自分で背負ってやろうという先生のあのいつもの気概と責任感と抱擁力に、私達はすっかり甘えてしまって、ますます先生に御負担を重ねさせてしまいました。先生が病床に臥されて以降のこの一年間、私達は途方にくれると同時に、先生の存在の重さと御苦労の一端を知り、もっと〳〵先生のお力になれていたら、といまさらながら悔まれてなりません。

先生の峻厳犀利なあの御講義も、一点一画をも忽せにされないあの演習も、私達はもはや受講することができません。また、先生の血を代償に流されたようなあの御論文も今後は目にすることができなくなりました。しかし、私達にとって先生は決して、単にお亡くなりになったのではありません。私達の心の灯として、不死なる魂として、私達のうちなる先生として蘇り、今後も生き続けて下さることでしょう。先生の魂は不死であります。これからも私達を今迄どうり見守り、お導き下さい。この上は、先生の播いて下さった種を

大切に育くんでいくことこそ私達の使命であり、先生の御恩に酬る道だ、と肝に銘じ、力足らずの私達ではありますが、いっそう精進して参りたいと考えております。

先生。先生の畢生の御仕事である弁証法の研究、特に先生の最後の大著『若きヘーゲルにおける媒介の思想(上)』はゆうに国際水準を抜くものであり、先生を師とあがめる私達には、この人こそ私達の師なのだと誇れる喜びを与えて下さいました。

先生、本当にお疲れになったでしょう。本当にお疲かれさまでした。御苦労さまでした。暫くお休み下さい。

昭和五十九年二月二十日

門下生代表

里　見　軍　之

（大阪大学文学部助教授）

弔辞

本日ここに故高橋昭二教授の文学部葬が行われるに当り謹んで弔辞を呈します。

君は昭和二十六年三月京都大学文学部を卒業され、昭和二十六年六月大阪大学文学部哲学哲学史第二講座の助手となり、当時創設間もない文学部において、第二講座の伊達四郎教授のもとに教育と研究の道に入られ、昭和三十八年四月講師、三十九年助教授、四十五年教授に昇任されて、ひたすら大阪大学文学部の充実と発展につくして来られましたが、不幸、病魔の襲うところとなって、現代医療技術の最先端をもってする治療看護もむなしく、遂に不帰の客となられました。誠に悲しい極みであります。

君は三十三年前、大阪大学に着任されてこのかた、孜々として教育研究に従事し、あまたの論文や著作を世に問うて、学界の指導的地位をになわれました。

学問に対する君の激しい情熱は、夙に多くの友人の知るところでありましたが、病状が悪化した後も、なおそれは君を動かしつづけ、君の死の数日前、二冊の著作の形に結晶して、学問に従事するすべての者に深い感動を与えました。

生来鋭敏な思索力に恵まれた君に、なお天が幾許かの時間を与えてくれたならば、更に大きな業績があげられたであろうと思うにつけても、君を失ったことは、大阪大学にとっても、わが国の学界にとっても、大

きな損失であり、誠に残念と申す他ありません。

君はまた学生の教育にも強い情熱をもってあたられ、厳格でしかも懇切な君の指導のものに、幾多の有為の人材が学界、教育界に送り出されました。さらに君は、評議員、各種学内委員として、強い責任感をもって大学の運営に尽力されました。

これからのことを思うとき、職の途中にして君が世を去られたことは返すがえす残念なことであります。

しかし能うかぎりの医療の手を尽され、御家族の献身的な御看護のもとに、最後の最後まで学問の道に精進されて止むところのなかった君の御姿は、天上に光り輝く星辰のように、いつまでも燦然と光りつづけて、後進を励まし導きつづけることと思います。

ここに生前の御功績に対し深い敬意と感謝を捧げ、心から御冥福をお祈りします。

昭和五十九年三月二十八日

大阪大学総長

山　村　雄　一

（大阪大学名誉教授）

弔辞

高橋昭二さん、思想と学問の世界では絶えず大小の波風が立ちさわぎ、あらゆる方向からする潮流が入り乱れますが、あなたは終始巌のごとくにゆるぐことなく、アカデミズムの正統を堅持し、すぐれた業績と敬愛すべき人柄をもって学界に貢献してこられました。その功績は日本中の哲学研究者が知っています。

私個人としても近くは昨年夏に、あなたから懇切なお手紙をいただき、最近の論文を載せた『哲学論叢』を頂戴しました。そのときあなたは、御自分の病気の深刻さを完全に承知しておられながら、あらゆる苦痛に耐え、絶望の淵を乗り越えて、学問と教育の仕事について熱心に語られました。それはまことに驚嘆すべき気力と情熱でした。

昨年の終りにはあなたの二冊の本が出版されました。その最後のものは未完に終わりました。業なかばにして熄んだことは、惜しみてあまりあるところです。しかしその「はしがき」で、死を宣告された床にあるあなたは、自分が哲学を志し、その研究に専念できたことの幸せを、高らかに唱いあげておられます。そしてこの本がその幸せの表現だと言っておられます。すばらしい心境です。あなたはこの世で最も苛酷な病いと激しく戦い、そして見事に勝利を得られたのであり、輝かしい死を全うされたのです。

あなたが長年会員であられ、委員会のメンバーでもあられた日本哲学会を代表して、ここに哀悼と賞讃の

辞を捧げます。

一九八四年三月二十八日

日本哲学会委員長
山　本　　信
（東京大学名誉教授）

弔　辞

高橋さん、あなたが逝ってからもうひと月がたとうとしています。しかし私はあなたの生命を中途にして奪っていった運命に対して、或る憤りのようなものを、未だに打ち消すことができません。ことさらに厳しかったこの冬が去り、今ようやく春の気配があたりを浸してきても、あなたの居ない空洞が冷え〳〵とそこに立ちつくしています。無念の想いに冷たい唇を噛みしめるしかありません。

高橋さん、私が文学部で親しくあなたと行を共にしたのは、わずか四年にすぎませんでした。しかし幸か

不幸かそれがあの紛争から人間科学部の独立と続く激動の時期だった故もあって、お互いに四〇を過ぎて出会ったにかかわらず、私たちは青春の頃にのみ許されるような、打ち割ったつきあいをすることができました。たんに同僚としてばかりでなく、学問上の同行者として、しばしば杯を傾けながら夜を徹して語り明かした酒友として、あなたが示してくれた深い友誼に対して、あらためて感謝の言葉を申し述べたいと思います。

かずかずの個人的な想い出は尽きません。しかし高橋昭二は何よりも一個の哲学者でした。だから今、ここであなたの哲学について一言することを許していただきたい。忌憚なく言わせてもらえば、哲学というものがたんなる人生論に終るなら、それは哲学の堕落だと言えましょう。しかし哲学が、客観的知識の集積としての学問に尽きるなら、それも哲学としての堕落と言わなければならないでしょう。この二つをどう結び合せていくかによって、その人の具体的な哲学の形ができ上っていくのだと思います。不遜なことを言わせてもらえば、かって私はこの点について疑念を感じたことがありました。高橋昭二において哲学は生きる上で、あるいは死ぬ上で、力になっているのだろうか。彼は人生と分裂した形で哲学という学問をやっているのではないのか。しかし高橋さん、あなたがわれわれに残していってくれた二冊の本を読みかえして、私はいかに私の疑念が浅はかなものであったかを思い知っています。

高橋さん、あなたがやろうとしたことは、カントとヘーゲルの間に起ったことを現代において反復しようとする努力だったと申せましょう。内容的に言えば、それは、理想は実現されねばならず、しかし実現された理想はもはや理想ではない、という二律背反を自ら生き抜くことだと言いかえてもいいかも知れません。

あなたは著書の中でカントからヘーゲルへという道とともに、ヘーゲルからカントへという道のあることを繰り返し示唆しています。そして「カントの批判主義の謙虚さの方が、ヘーゲル的な絶対主義の哲学よりも好ましく思える」旨を述懐しておられます。これはあくまで外なる理想を内に取りこむことを努めつつも、理想の外にしかありえないありのままの自分を見つめようとする謙虚さ、それを、すべての出発点にしようとする覚悟の表明にほかなりません。死を覚悟して以来「初心に帰る」という言葉の行方にあなたがさし示しているこの謙虚さこそが、あなたの哲学の原点にあるものであり、そしてそれがあなたを生かす力となり、また死に面しての力となりえたことを今は信じて疑いません。

高橋さん、あなたが亡くなられる数日前、最後に病床を見舞ったわれわれの仲間の一人が、いただいた本への御礼を申しのべたのに対し、あなたは「君たちに読まれたら恥かしいよ」と言ってかすかに微笑まれたということです。その恥らいを浮べた謙虚な笑顔を、高橋さん、これこそあなたのものだとして、われわれは永く忘れることはないでしょう。

高橋さん、中途にしてあなたを奪っていった運命に対して、私は尚憤りのようなものを打ち消すことができません。絶筆となったヘーゲル論が、「愛による運命との和解」の章で途切れざるをえなかったのも何という運命の皮肉でしょうか。しかし運命に対して憤りを感じることにすら、あなたの謙虚さは、それを人間の倨傲さだと言ってたしなめるようにも思われます。

高橋さん、あなたの五十六年の生涯はけっして長いものではありませんでした。しかしそれは長い戦いの連続でした。今はゆっくりと休んで下さい。おっつけ僕らが訪ねて行く迄、それ迄は、手酌で盃を傾けなが

ら待っていて下さい。ではそれまで、しばらくの間、ごきげんよう。

一九八四年三月二十八日

友人代表
徳永恂
（大阪大学人間科学部教授）

弔辞

高橋さん、昨年の初夏の頃貴方が阪大病院に入院され、最初の手術を受けられたあと、病の正体を感じとられた貴方自身の口から病名がはっきりと告げられたとき、われわれが受けた衝撃をいまだに忘れることができません。自らの病が不治のものであることを覚られた貴方は、担当する講座のことなどについて遺言のような言葉を洩らされました。慰める術もなく、われわれは黙って耳を傾けるほかありませんでした。貴方のおもいはわれわれの胸に突き刺さっています。

高橋さん、貴方は自らの病を運命と受けとめられましたが、貴方の早すぎる御逝去は哲学科にとっても重い運命といわざるをえません。同僚のわれわれは勿論のこと、とくに若い諸君にとってこのおもいは痛切です。「運命との和解」、貴方が最後に研究対象とされた若いヘーゲルは、このことを彼の哲学の核心にすえました。「われわれの運命との和解」、これが今哲学科に課せられています。幸い貴方は貴方の薫陶を受けた若いすぐれた研究者をあとに遺されました。

これらの人達はこの運命を十分自覚するが故に、厳しい現実のうちに和解に至る理を見定めて精進努力されるものと信じます。同僚としてわれわれはこれらの諸君を支援し、貴方から託された事柄を成就するために全力をあげて努力する所存です。高橋さん庶幾わくはわれわれのこのおもいを承けて、安らかにねむられんことを。

昭和五十九年三月二十八日

哲学科代表

岸　畑　　豊

（大阪大学名誉教授）

弔辞

高橋先生、先生が永眠されてからもうひと月以上になります。先生はやはり逝ってしまわれたのですか。もう戻っては来られないのですか。我々は残念でなりません。今でも先生の厳しい声、優しい声が聴こえてきそうな気がします。

先生は授業のために、ほとんどいつも前の日徹夜されていましたが、その講義はこちらがノートを詳しくとればとる程、緻密で周到なものであることが判ってくるような講義でした。またそれは奥深くて、こちらが全部判ったような気がしていても、数年してノートを見るとこんなこともおっしゃっていたのかと驚くことたびたびでした。

先生の演習と研究指導は、大変厳しいものでした。しかしそれは、先生の学問に対する厳しさから来るものでした。我々が先生の厳しさを、学問に対する厳しさとして内面化してゆくことを、先生は求めておられたのだと思います。しかし我々にはまだまだ先生に対する甘え、学問に対する甘えが残っています。月曜日の演習が終わった後、先生はいつも学生達を飲みに連れていってくれました。また落ちこんで御相談に行った時には、いつも優しく親身に励ましてくださいました。これから先生なしにどうやって研究をしていったらよいのか、途方に暮れてしまいます。もっともっと教わりたかったと残念でなりません。

先生は昨年の春、大学の桜が満開の頃入院され、それから二度の大手術に耐えられました。長い間の御闘病生活、御苦労様でした。ひときわ厳しかった今年の冬も漸く終わり、また春になろうとしています。今度は我々が悲しみに耐える番です。どうぞ安らかにおやすみください。そして、いつまでも我々をお導きください。

昭和五十九年三月二十八日

門下生代表

入　江　幸　男

（大阪大学文学部助手）

高橋君　安らかに

澤瀉久敬

「宿命は本来ただ必然であるが、運命は必然と自由との綜合である」と伊達四郎君は言った。高橋昭二君は伊達君に高校二年のとき初めて教えを受け、彼の哲学に魅せられ、圧倒されて哲学の道に進み、彼の門下生として伊達君の哲学精神を身につけたのである。そして哲学とは何かを学ぶと共に、伊達君自身の哲学を深く正しく把握した。「伊達先生の哲学」は伊達君の哲学を理解するのに不可欠の一文である。

しかし恩師を失った高橋君の悲しみは言語を絶するものだったろう。師の他界を契機に「初心に帰り」（これは伊達君の最も好んだ言葉である）『カントの弁証論』を公にしたのは、哲学を一から勉強し直そうとする決意の現れであった。そして昨年『カントとヘーゲル』の表題のもとに、過去の諸論文を一冊の本に纏めたのも、心を新たにして哲学を一から始めたいとの気持からだった。高橋君はこの論文集をご母堂に捧げた。

昨年、彼はもう一冊『若きヘーゲルにおける媒介の思想（上）』を出版した。これこそ彼が精根こめて取組んだ論考である。そしてその下巻を出すこと、即ちこの論文を完成することこそ、彼の切実な願いであった。けれども高橋君は自分の体がガンに犯されていることを知った。しかも肺ガンについては卓絶した治療によって九死に一生を得、自分の仕事に再び戻りうることにこの上ない喜びを感じ、病気の再発せぬことを祈る気持で一杯だったのに、

ガンは脳に転移した。それを知ったときの彼の苦悩はいかばかりであったろう。前記二書を上梓したのは、彼が自分の運命を知ったからだった。「私に残された時間は僅かである」と序文する彼の言葉は私たちの胸にせまる。高橋君　無念だったでしょう！　その中にあって君は自分の仕事を纏めて自分で出版し、ご令弟はじめ医師の先生がたや、大学の同僚また謝すべき方々に感謝の言葉をはっきりと述べておられるのをみるとき、私は君の人生脱出の見事さに驚嘆せずにはおれません。宿命には逆うことはできない。運命を生き抜くことこそ哲学者の生き方である。

高橋君　安らかに

―一九八五年　秋―

（大阪大学名誉教授）

秋夜閑窓

甲田和衛

自分より若い人の思い出を綴るほど空しいことはない。

高橋さんの名前は、文学部「創立十周年記念論叢」（昭和三四年刊）の執筆者のなかにはない。新しい学部で、部内の助手から助教授に昇進された唯一の人として、高橋さんは、当時、私には格別の人に見えた。親しくおつき

合いが始まったのは、文学部内の分裂、後の人間科学部創設反対を伴う大学紛争を通してである。

高橋さんの紛争にたいしてとった態度と役割について、その一つ〳〵を私はかなり詳細に誌することはできる。なぜならば、紛争時から入手可能なかぎりの資料と、詳細な日誌とをいまも手許に置いているからである。しかし、いまこれに触れる気持はない。ただ当時、暴れ、傷ついた院協の学生諸君を、手厚くいたわっておられた高橋御夫妻の姿は、いまも眼前にある。もしもいま、私に書けるものならば、高橋さんの遺著『若きヘーゲル』と、令夫人の「高橋診療所」との結びつきについて、真剣に書いてみたい、という思いにとらわれることがある。おそらく、書くことはないだろうし、容易に書けることでもない。

高橋さんにとって、紛争は事実上、伊達四郎遺稿集『別離の論理』(昭和四四年刊)によって幕を閉じた。その後は、石橋と吹田に別れて、高橋さんと身近に接することのないまま、五八年、私は大阪を後にした。「やっと秋めいて参りました。あるいはおきき及びかも知れませんが肺ガンが右脳に転移し、十三日阪大病院で開頭手術を受けることとなりました……必ず元気になって帰って参りますから、決して御心配下さいません様に。……」というお葉書の日付は五八年九月十日である。そして「……残念なことに十二月から阪大病院へ三度目の入院をいたしております……腎ぞうに来ました。しかし頑張ります……」が五九年の年賀状である。

私は人のお手紙をきちんと保存する方ではない。ただ高橋さんの少ないお葉書は、その気魄に押されて、別のところに保管していたに過ぎない。その気魄は、哲学者としての高橋さんの覚悟と、医師としての高橋令夫人の激励によって支えられていた、と思う。

あるものは別れだけである。もし私に信仰があれば……知恵をもって主を求め、心をもって主を愛し……と祈る

こともできる。あるいはまた、いい時に亡くなられた。もう少し長生きされたとしても、高橋さんにとって住みやすい世ではないように思われる、ということもできる。

しかし「人と別れる自己は彼と共に在りし自己に別れ、人の死に逢ふものは彼と共に在りし自己を死なしめなければならぬ」(『別離の論理』三四頁)ことに、高橋さんとともに、私は耐えます、とは、いまはまだいうことができないでいる。〃どうして〃と御遺体に語りかける機会も失したまま、ただ老残無頼であるからである。

とうろうをみたびかゝげぬ露ながら

という蕪村の詞書、「秋夜閑窓のもとに指を屈して、世になき友を算ふ」ことで、ようやく背筋を正すのみである。

(一九八五、一一、一)

(放送大学副学長)

昼と夜と

木村重信

数年前、あるパーティがあった。小さな内輪の会なのに、紋切型の挨拶がつづき、座がしらけた。そこで、私が指名されたとき、座の雰囲気を和らげようと思い、そこに居あわせた人たちを対象に、即興で謎かけを試みた。と

っさの思いつきで、しかも酒の勢いも手伝って、失礼なことを言うかも知れないので、ごく親しい友人に限った。そして高橋昭二君について、こんなことを言った。

高橋君とかけて、何と解く
器量のよくない年増芸者と解く
心は、昼と夜の変りようがはげしい

もとより、品のない駄洒落で、高橋君もよい顔をしなかったが、私における彼のイメージは、いまもそのときと変っていない。

夜の高橋君は酒をよく飲んだ。ドイツに留学中、胃潰瘍になって中途で帰国したが、やや回復すると、また飲み始めた。薬とアルコールをちゃんぽんにしながらである。だから病気は一向によくならなかった。少し元気になったとき、「酒をひかえているのか」ときくと、「いや、本を読むのをやめたら、よくなった。酒は関係がないらしい」と言う始末である。彼は拙宅での新年会の常連でもあったが、いつもおそくまで居残り、酔っぱらっては人にからんだ。また深夜に電話してきて、大阪のなじみの店に出てこいと強要することも屢々であった。

昭和五十八年の夏、高橋君は肺癌の手術をうけた。困難な手術であったが、幸い略治して、退院した。ところが間もなく、癌が脳に転移したので、再び入院して手術をうける旨の電話があった。彼の家を訪れた私が見舞の言葉に窮していると、ビールをとり出してきて、飲もうという。相客が数人いて、みんなで飲んだ。本人が死を予期しているだけに、そのビールは限りなく苦かった。彼の家を辞して通りに出たとき、どっと涙があふれてきた。

死の直前、高橋君は『カントとヘーゲル』『若きヘーゲルにおける媒介の思想(上)』という二冊の書物を刊行し

た。その「はしがき」と「あとがき」に闘病の記を書いている。「著者も哲学者の端くれである限りはこの絶望感を断ち切らねばならぬと思う」に集約される文章は、壮絶としか言いようがない。

昼の高橋君は謹厳な哲学者であった。いつも床の間に西田幾太郎先生の書を掲げていた。そのなかの一幅「七里はま夕日漂う波のへに　いつの山々果し知らずも」は、懇望して私がもらった。高橋君はまた伊達四郎先生を尊敬していた。彼の厳しさは伊達先生ゆずりであるが、高橋君の場合、学問のみならず、人にたいしても鋭い言辞を吐いた。しかしその言葉が、外にむかってというよりも、むしろ内にむかっているように感じられたところに、彼の人となりがあった。

『若きヘーゲルにおける媒介の思想 (上)』の末尾において、イエスがその愛をもってしても苛酷な運命に遭遇し、破れざるをえなかった事情を、ヘーゲルに則して書いている。このイエスの「美しき魂」の選んだ道と、高橋君の運命とが、私のイメージにおいて交錯する昨今ではある。

(大阪大学文学部教授)

集中講義　三題

高橋怜子

I　岡山大学

「きれいな色の服やなあ」
「マカットグリン云うのんよ」
「ふむ、ふむ」

昭和五一年、岡山大学へ出掛ける時の昭二クンと私の対話である。この時もすでに体力大分減退し集中講義用の本が重すぎて、持って欲しいとの事での岡山行きである。(こんな事でもない限り私達二人での旅行なんて、ないもんねー)

此のすぐ以前に女子医専のクラス会が岡山でありホテルの予約は私がほい〳〵とひきうけて電話で申し込んであった。

西行きの新幹線は山、又、山で昭二クンはそれが自分の責任ででもある様に

「景色、悪いやろ。すまんなあー」をくり返した。夕方に大阪を発ったので岡山駅に着いた時はすでにたそがれ

ていた。タクシーで

「グランドホテルへ」と私。車は動き出した。

「えへへ。一寸道順違いまっせ」

「グランドホテルでしょ、予約してありますのやろ」

何やら知らんけど一寸違う。坂の途中から車は俄に「えいっ!!」とばかり曲って、ほの暗い電灯のついた小さなホテルの玄関で止った。

「此処ですよ」

「へえー?!」と私。昭二クン、ニヤ〳〵している。とり敢えず仕方がないので車代を払ってホテルのフロントへ直行。

「阪大の高橋です」

「はい、お部屋とってございます」

「あー。もう万事休す」

私は思わず絶望的な目で昭二クンを見た。彼氏は一寸怒った様な、又か?と冷やかす様な表情でニヤ〳〵。部屋はこじんまりして何とも云えぬ静寂さ。カーテンを急いであけると目の前にも上にも下にも深緑の山々が重り合っている。もう一度部屋を眺める。まあ三流どころかな?

「何やフランス映画、うん、ルネクレール!! 北ホテルより上等や。これでええ。」

と昭二クン。私は何となく気分落ち込む。

それでも「ルネクレール、ルネクレール、ルネクレール」と三度つぶやいたら一寸うきうきしてきた。単純ですねえ。バスのノブを遠慮がちに廻してみる。まあ入れそう。

「食堂　何処やろな？」

「ルームサービスして貰ったら？」

「まあ、そう云わんと探険や探険や。」

食堂もこじんまりしてわりにアットホーム。

山あいにちらほらと灯がみえてロマンティック。

「ねえ、一寸スイスへ行ったみたいよ。但し、窓の外だけ見てんとあかんけれど」

「アホか。スイスの山はもっと、きびしいわ」

それでも最初にでたポタージュがおいしいと昭二クン御満悦でほっとした。バァもなく直ちに部屋へ帰ったが私は何となくおかしくなって一人でヘラ〳〵としていたが遂にはおかしくて、おかしくてベッドの上を転げ廻って笑っていた。

「鈍くさい奴や。何処へ行っても」

と云い乍ら昭二クンもルームサーヴィスの水わりを飲み乍らヘラ〳〵と涙を浮かべて笑っていた。

翌早朝モーニングコールで起こされる迄もなく私はとび起きて、上り新幹線に乗るべく身支度をした。昭二クンは私より早起きで最早や今日の講義の下調べだろうか本を開いていた。

「明日帰るけど電話するから上り六号車のホームで待ってくれ。本、重いからな。新幹線へは誰かに頼んで運ん

で貰うから」

「オーケー。上り六号車やね。ゲルある？」

「うん」

「足らんかったら又電報ガワセでね」

前科何犯？　私は七時すぎの新幹線で一路大阪へ!!

「ただいまあー」

待合室はクランケで山盛りだった。

明日は六号車。六号車。

。六号車は下りエスカレーターがすぐ傍にあるのです。

。ホテルはあとで調べたら岡山国際観光ホテルの間違いと判った。大ドジで岡山の友人に笑われた。

「あんちゃん（旧姓安藤）らしいわあー」と。

II　静岡大学

現助手の入江君の結婚式が無事すんだ。仲人役をひきうけたので式服一式二人分を提げて新大阪へ出発。明日から静岡大学で集中講義である。私は相変らずの本運びでのお供である。新大阪のコインロッカー二ケ所へギューギューと余分の荷物を押し込む、留袖、シワになってもしようがない。兎に角、二ケ所へ納って貰わんとどうにもならへん。

「おい、入ったか？」

「うん、入ったわ。立派な引出物やね」

どうにか予定通りの新幹線に乗れた。勿論コダマ号である。よく止る。東へ。東へ。何やらドサ回りの旅役者の心境になる。それでも車中は今日の結婚式が話題になり昭二クンも少し興奮気味。「よかった、よかった」と嬉しそうである。

夕方やっと静岡駅に着いた。向う側、下りのプラットホーム。おばはん集団でにぎやかである。

「あれ、何やろか？」

「あっ、そうや。創価学会の連中やで。帰りは一寸ずらして帰れよ。困るで」

「ほんと。ほんと!!」

げに　信仰とは　すごいもんです!!

静岡駅は都会派的イナカのムードです。

「今回は何処で泊るの？」

「静岡駅前、ワシントンや」

「へえー。すごいね。ワシントン」

南側へ出る。何処も自転車だらけ。およその目見当をつけて歩き出す。本が重い。

「おい、間違うたらしいぞ。本、重たいか？」

「まあね。百聞は一見に如かず。聞くべし。　聞くべし」

「おい、此処やで。目の前や」
「ひやー、余り大きすぎて目に入らんかったね」
二人共、何となく足をひきづってワシントンホテルへ入っていった。まあ五人も乗ったら満タンのエレベーター。重たい本でっせ。墜落しまへんかと心の中でつぶやく。背のびしたら足が出そうなベッドへ本をどさりと放り出す。
「ねえ、此処ビジネスか、つれ込みの感じやね」
「お前、つれ込みて行ったことあるんか？」
「アホらし。今どきつれ込みの方がもっと立派なんとちがう？」一寸、駅の案内所で聞いて場所変ったら？　こんなとこ、疲れとれへんよ」
「静大の連中が折角世話してくれたんやから、ここでえーわ。都合で明日、何処か探して貰うから」
まあ、お義理のお堅いこと。昭二クンらしいと思ってしまう。
昭二クン黙々と本を片づけ始めた。一寸だけ手伝う。何やらしんどくて何をする気も起らぬ。
「お風呂、水張ろか？」
「うん、そうして呉れ。それから一杯や。元気でるやろ」
「そうやねー」
と云い乍ら私は必要以上にお湯と水をジャアジャアと出す。わざとしぶきを浴び乍ら、ふっと、いつ迄この様な旅興行が出来るのかな？　入江クン、今頃どうしているかな？　等とりとめなく考えてしまう。
一風呂浴びた昭二クン、やっとこさ一心地ついたと云い乍ら水わりを飲み出した。

「お前も一風呂浴びたら？　一寸は疲れ、とれるで」
「そうやね。何しろワシントンのお風呂やもんね」
一汗した二人の肌着をビニール袋へつめ込み
「ほな、帰るわ。これワシントンみやげや。夕食、どうする？」
「今は飲めても食べられへんで。何やったらつき合うてもええけど」
「私も、いらん」
そんならと昭二クンは目と鼻の静岡駅迄送ってくれた。
「おばはん連中おらへんな。これなら坐れるで」
と言い乍ら大阪駅迄の切符を買ってくれた。その間に私は駅弁とお茶を二つづつ買って一つづつ無言で渡した。
その夜おそく静岡から電話がかかり
「無事、着いたか？　疲れたやろ。静岡ワシントン、矢っ張りあかんわ。何やらネオンチカチカ。ひとけ、ざわざわやねん。明日は何処かへ移るわ。あさって六号車やで。御苦労さん」
「ああ、それがええ。それがええ」
私はモーニングも留袖も放り出したまま、眠ってしまった。けれど、頭の何処かで、明後日は六号車。六号車とくり返していた。

Ⅲ　広島大学

「今度は広島や。東急イン、とっといたからな、インやで。又お前さんどじるからな」

又、地方巡業ですか？　えらい西ばかりですねと思い乍ら手早く着替えの用意をした。最近は最早や私も手慣れたものである。

いざ、広島へ出発。この度は西行き新幹線の景色の悪いのも、重い本の荷物も余り気にならぬ様で、ゆったりした顔つきで昭二クンは新幹線の心地悪い振動に身をゆだねている。岡山からは一駅づつ止る度に説明してくれる。岩国育ちの姑が娘時代を福山や尾道で過ごした事があり、又従兄が徳山在住だったりで何となく土地に親近感のあるせいだろうか？　私は只々、巨大なコンビナートに先行きの不安を禁じ得なかった。ほんと、これどうするのんやろーねー!!

広島駅到着。私には始めての広島。駅を出る。兎に角、道幅が広い。よせ集めの色々なスタイルの市電がゆっくり走っている。

「ほんまに原爆、落ちたん？」

と思わず云ったら

「落ちたから道幅広いねん」との答が返って来た。東急インホテルへ着く。ロビーには広島の色々なみやげ物が所狭しと並べてある。有馬兵衛の向陽閣も何やら一杯並べてあったなとふと思う。小じんまりしているが、新しくてそのくせローカルカラーも豊かで今迄とは一寸ムードがちがう。部屋は三階で、まあ〳〵の感じ。荷物を放り出して鏡台の前へ坐ってみる。

「今日わ。まあババアになりはって」

と鏡の中の自分に挨拶する。昭二クン、疲れたのかベッドの上でひっくり返っている。

「一寸寝るわ。今晩、市内案内してやるからな」

「どうぞ、どうぞ」

街が暗くなった。ネオンがちらほら。雨が少々。

「出掛けよか？　今晩泊るか？」

「その時の都合にするわ」

何やら気忙しく車を拾った。雨脚は相変らず。午後来た道を逆行。昭二クン

「八丁堀りの手前でおろしてくれ」

と云っている。

「良明（従姉の息子）の処へはあとで行く。先にうまいもんでも喰うか？」

「はい。はい。おいしいもんなら何処へでも」。急に空腹を感じる。道がゴチャゴチャになったので傘一本で歩く。「酔心」というわりに大衆的な感じの清潔な大きな店があった。地酒酔心の直営店とのこと。丁度「カキ」の季節でカキ料理が幾種類もメニューにのっている。「カキ」と名のつくものを、とりあえず全部注文するので

「一体、誰が食べるのん？」

ときくと

「お前さんに決っているやないか。オレは酒や、酒や。」

「アホかー」

と云い乍らそれでも次から次へと運ばれる料理を私は殆んど消化していった。昭二クンはニヤ〳〵し乍ら

「うまいやろ」

と自慢そうに云い、珍しく自分も酢ガキや鍋物をつついていた。

何となく体が温ってしあわせな気分。

「さあ何処へでも行きまっせ」

と云うと、一寸歩いてみるかと心斉橋と千日前を足して二で割った様な商店街へ出た。

「お前さん買物ないか？」

「特別ないわ」

ふと気がつくと大きな靴屋の前であった。

「むく犬の靴　あらへんやろか？」

「そやな　一寸入ってみるべーか」

むく犬の靴というのは昭二クンの靴のことで先の尖ったスマートなのはすぐ痛い痛いと、およびでなく、むしろ先が拡がって親指から小指迄五本の指がゆったりと鎮座まします様な靴がお気に入りなのである。当然何となく間がぬけてしまりなく、コリーやスピッツのイメージとはおよそ程遠いので「むく犬」といつの頃からか私が命名したのである。クランケの靴屋で頼んではあるのだが最近のモードには追いつけず「難儀やねー」と云っていた矢先だったのである。

靴店の中は奥深く二階にも売場があり、結構若いお客で一杯である。店員に

「これと同じ様なデザインの靴ありませんか？」
と云うと昭二クン、ひょいと片足を上げたので、私はびっくり、慌てて彼の細い体を摑んだ。ああ、骨ばっかり!!
「おかみさーん」
と店員が奥に向って叫ぶと三十四、五才の如何にも働き者といった感じの奥さんが小走りに現われた。
「ああ、それなら最後のがあった筈」
一寸待っていると
「三足ありましたわ。売れ残りですからおやすくしておきます」
何卒サイズが合います様にと祈る様な気持でいると丁度ピッタリだった。
ああ神様!! この靴と昭二クンの生命とどちらが長持ちするでしょう。そんな気持がふっと横切る。いかん〳〵。
さっさっさと手早く荷造りをしてくれたのを私がぶら下げると
「オレ持つわ」
と云うので素直に渡した。何やら嬉しそうである。「オカアチャーン」という感じ。階下に下りると更に人混みは増して店の中が明かるくなった様な気がした。
「迷子になるなよ」
「はい。はい」
出口の処で運動靴が山積みしてある。どれでも一足三〇〇円と書いてある。昭二クンの足が不意に止った。
「おい。運動靴買わへんか？」

「運動会する気？」
「いや、オレ体力おちてるから毎朝歩くかな？」
「ふーん」
これは、えらいこっちゃと思った。
「お前も一足買えよ。同じデザインのを探がせ」
「どうなったん？」という言葉をのみ込んで、さあ、得意中の得意の特価品あさりを開始した。
「これね。ごっつう醍醐味あんねんよ。あった、あった」
ベージュに白で縁どりのしてある洒落た運動靴である。
サイズ　昭二　二四・〇糎
　　怜子　二三・五糎
〆めて金六〇〇円を払うと今度は広島の新聞紙でくるくるっと包んでくれた。
「わあ、夜店のバナナみたい」
と私が云うと
「今夜は思いがけん　ええ買物(カイモン)したなあ」と云い乍ら深呼吸している。さらりと二階の靴と一階の靴をとりかえて持つ。
「これから、どないする？　泊るか？」
「うん。やっぱり帰るわ」

「そんなら駅迄　送るわ」
「雨降ってんのに　ええわ」
「帰れるか？」
「ふん、帰れる　帰れる。　あんたこそ大丈夫？」
「もう一寸飲んで車で帰るから心配せんでもええ。帰ったら何時でもええから電話かけてくれ。起きるからな、インやで、東急イン」
「又、べんきょ？」
「一寸、下調べせんと心配やからな」
「御苦労様」と云いたいのを「ふん」という言葉で私は広島駅へ急いだ。
丁度シーズンで、大安で、プラットホームは大混雑である。指定席なんてなんてである。
かけ上ったのはいいがふと気がつくと、どうもヘン。更に西行きである。発車のベルで慌ててとび下りた。合計五足の靴が荷物である。結局、立ん坊で新大阪に着いた。
「もし〳〵私。元気？　飲んだ？　私危く博多迄行くとこやってん」
「アホか!!　ほんまに今、診療所から電話してんのか？　飲んだけど此処の酒はうますぎて勉強にならん。もう寝る。六号車やで」
はい。もう六号車は慣れました。
御心配なく。御無事でね。

「附記」

。岡山へは二度行った。二回目は倉敷迄遠出をし、美術館で二人は堪能した。

。広島へも二回行った。二回目は姑と三人連れで矢張りホテルは東急インであった。

岩国へも足を延ばし姑の実家の苔むした墓へも参った。五分おくれで新幹線に乗れずタクシーで海岸べりの国道を広島迄とばした。私は何年ぶりかで生きた海を目近に見た。

巨大なコンビナートは細々と息をしていた。

。むく犬の靴も二足の運動靴もそのまま残っている。むく犬は三足を代る〳〵履いたがアインパールの運動靴はま新しいまま下駄箱の中で眠っている。

先日医師会句会の吟行が山歩きだったのでああ　あの靴をと思い出し、とり出してみた。暫く掌の上にのせて眺めていたが所詮アインパールはアインパールだと思い又下駄箱へ戻した。

もしまだ私が生きていたら孫二人へ、大阪ヂーちゃまとバーちゃまが履き損ねた靴よと説明してお下げ渡しと致そう。

あっ。でもね。秀(ヒデ)チャンも惇(アツ)チャンも履いてくれるかなあー？

どんな時代になっているか判らへんもんねー。

（S60・9・03、脱稿）

（高橋診療所）

高橋昭二と私

加藤直邦

悼辞。「チャップイ」という流行語を生んだ今年の厳しい冬も漸く去り春近いという時、君、高橋昭二は逝ってしまった。一年前に君が病床に臥してから阪大病院に入院すること両三度。病院の屋上で秋の陽を浴び煙草を喫いながら医学技術の発達について話し合った時、君は「制癌剤も神の前には無力なんや」と淡々と語ったものだった。死に到る病にとりつかれて死を自覚しての闘病生活は、さぞ苦しいものであろうに、君の悟り切った態度に改めて敬意を深くしたものだ。それは、君が生涯、人間とは何ぞや、ということを真剣に追求し続けた故に達し得た境地であったのだろう。

思えば、私達が始めて会ったのは昭和十九年四月、桜咲く甲南高校の学び舎であった。あの戦争末期の頃、私達は動員されて農村や工場へ行かされたが私達は常に寝食を共にした。又、君の夙川の家に遊びに行き御両親御兄弟に迷惑をかけたことも忘れられない。君は胸の病に犯され一年留年したため、一緒に甲南を卒業することができなかったが、私達の交際は尽きることがなかった。白浜で泳いだことも、伊達、室田、本田の諸先生を宇治へお誘いしたことも、年に一度集う同窓会で六甲や富士五湖へ行ったことも、すべて懐しい。

君はどこへ行ったのだ。天国か地獄か。どこでもよい。君の行った所へ、私も必ず行く。そこに海があれば一緒

に泳ごう。碁盤があれば烏鷺を戦わせよう。そして駄弁ろう。飲もう。何時までも。その日まで、高橋、暫くの間、さようなら。

昭和五十九年二月十九日

右は高橋昭二（以下、彼と書かして頂く）の死去の通知を受けた時に書いた弔辞である。今読み返してみると、あの時の、覚悟していたとはいえ何ともいえない心の昂ぶりを思い出すが、一年半経った今若し改めて弔辞を書くならば、矢張同じ文章になるように思う。彼の死後、何かにつけて彼への追憶が私の胸中をよぎる時これを小文にでもまとめておきたいという気持をもったものだ。併し、「故人を偲ぶ」一文をとの依頼を受けて改めて机に向うと、多くの思い出の中から一つ二つをとりあげて彼の知られざる一面を披露するようなエピソードのテーマの的を絞ることが出来ないことに気がついた。

前述のように彼との出会いは甲南高校入学の時である。私は念願の高等学校に入り新しい友を得て有頂天であった。併し静かに反省すると、彼を始め周囲の人間は皆精神的に兄であった。「どうしてこんな頭のよい奴が私如きレベルの低い人間と交際してくれるのか、或る日突然相手にしてくれなくなるのではないか」という恐怖の念に捉われた。恐怖の気持はいつしか消えたが、畏敬の念は今もって変らない。

私の無知のために、或は私に勇気がなかった故に、私は多くの人に大いなる迷惑をかけて生きてきた。特に身近な人についてそのことが思い出されると、頭髪を掻き毟って「許して呉れ」と叫びたい衝動に駆られる。それは、口に出して詫び許されて気が済むものではなく、癒えることのない心の傷である。彼に係る私の心の傷も私が死ぬ

まで消えることがないであろう。

私は大学で一年留年したので社会に出たのは同じ年昭和二十六年だった。彼は大学、私は電力会社と、生活の場を異にし頻繁に会うことはなかったけれども、三十数年間、彼の顔を見ない年はなかった。彼から「会いたいんや」という電話がある頃には私も彼に会いたい気持が亢じていた。私が電話した時にも彼は常に「多忙」ではなかった。会ってもとりとめのない話が多かった。社会的政治的思想について彼と私は相反する立場であったが、激しく議論することはなかった。相手の考えを尊重しながら、敢て相違点を明らかにすることを避けた風であった。

激しく厳しい個性の持主であった彼には語りつくせない多くのエピソードがあるだろう。併し、彼と私との関係に限れば、長い年月を共に生きた夫婦のようなものであった。特筆するような大事件はなかったけれども、心の襞にしみ込んだ思い出は多い。今私は、幾年月の歓び悲しみのかけらを、あますことなく、そっと、心の中に包みこんでおきたいと思う。

怜子さん及び編集の方々、私のわがままを許されよ。

昭和六十年夏

（関電産業株式会社常務取締役）

高橋君の追憶あれこれ

吉田眞策

それでもまだ元気だった頃の何年か前、高橋は死にたいと云った。迂闊にも当時はその真因を慮らずして、馬鹿な事を云うもんじゃないと反論した処、少し云い直して、我々仲間の中では一番早く死ぬと宣言した。宣言通りの事実となって了った大阪大学文学部葬に於いて、故人の声がテープで流された時、惆悵、落涙滂沱は遂に動哭と変じて了うのを禁じ得なかった。

旧制の甲南高校時代から始った四十年に亙る交誼は余りにも多くの事が有り過ぎた。そしてその四十年は流星が光芒の軌跡を描く如く須臾の間にして去って行った。偲びても猶余り有るという事は却って何も無かったのだという事かも知れない。せめては偉大なる人格との交りが確実に存在したという実感に対して神に感謝するにとどめよう。何故なら、若し我々に将来再生という事が許されるならば、再び交友が今度はとこしえに結ばれる事は明白だからである。

「君はぢぢむさい奴やなあ。そのぢぢむささをこれからもっと強く前面に押し出すべきだよ」とは、ずっと昔に故人が私に向って云った言葉である。従って何の脈絡もない故人の幾つかの想い出を、断片的に且、敢えてぢぢむさく綴ってみる事にしたいと思う。

唯、茲に申し述べておきたい事は、高橋が社会的に或は学問的に優れていたが故に、彼は私の友人であったのでは無いという事である。卑俗な表現を使えば、お互いの楽屋裏迄覗き合ってきたに過ぎない仲であるとでも云おうか。

× × × ×

高校のクラス仲間の雑誌に寄稿した故人のユニークなお伽噺も思い出の一つである。之を要約すると、「二つ墓の黄蝶爺さん」という題で、一人ぼっちのお爺さんが自分の死後の事を思い悩んで自分の為に墓を建て、それでも心が落着かないので二つ目の大きな墓を造り有り金全てを寺にも寄進するのだが、一向に淋しさが消えない。随分と苦しんでその為に、病気に罹って了った床での夢の中で自分自身が黄蝶になり、

さびしい者は蝶になる
生きたい者は蝶になる
お墓は誰もおりません

と唄い乍ら安らかな気持で二つ並んだ自分の墓の上に停る。夢が醒めると、本当に幸福で聊かも恐くも淋しくもなくなっていた……お爺さんが死んで春が来て黄蝶が二つ墓に翔んで来た、というのが概略であるが、その末尾に「お爺さんは本当に美しい人ですね。私も出来れば黄色い蝶になりたいと思います。そしてその為にお爺さんのように墓を二つも作る程苦しんでも良いと思います」と故人は結んでいる。

今となって顧い返してみると、当時、暗示し、象徴し、願った通りに故人は生きたのだから、今や黄色い蝶になっているのではなかろうかという気がしないでもない。

しかし一方、その頃、故人と一緒に読んだリルケの詩が合わせて憶い出されるのである。

死は偉大だ
楽しげに口で笑っていても
我等は死の一族だ
我等が生のたゞ中だと思っている時
死は容赦なく我等が内で
不意に啜泣きを始める

× × × ×

Zwei Dinge erfüllen das Gemüt mit immer
neuer und zunehmender Bewunderung und
Ehrfrucht, je öfter und anhaltender sich das
Nachdenken damit beschäftigt: Der
bestirnte Himmel über mir, und das
moralische Gesetz in mir.

悼　追

之は高校で独逸人の独語教師より学んだカントの実践理性批判の一節であり、印象深かったので、私でさえも未だに暗記している位であるからして、敢えて茲に転記させて頂くのは、懼らくは故人も、

der bestirnte Himmel と das moralische Gesetz

のカントの世界に魅かれて、カント学を初めとした一連の独逸哲学にのめり込んでゆく嚆矢となったのに相違ないと断定出来るからである。しかも猶、幸運な事には、大阪大学哲学科における故人の前任者、伊達四郎先生が当時は我々高校のクラス担任教授としておられたので、その時から適切なる薫陶を得る事が出来、Denker としての師弟関係を深めつつ、綿密細心且強靭な哲学的思索力と優れた哲学史的洞察力とを涵養して生長してゆく事が出来たと推量する事は、略、正鵠を失していないものと云う事が許されよう。

而し、私は故人とは社会にあって進んで来た道を全く異にするので、故人の学問的業績を適確に論(アゲツ)らう立場には勿論ない。

唯、私の立場から注記せねばならない事とは、当時若い我々の愛読書の一つでもあった「郷愁記」の著者に対して哲学界の親友達が殊更、「行為を以って哲学を示したにしても、彼は何の業績をも挙げ得なかった」という峻厳な批判を下されていた事を、故人は夙に知悉していたし、業績というものが学者にとって如何に重大な意味を持ち、大学教授というものは業績なしでは所詮存在価値が無く、しかもその業績の中身は独創的でなければならないと、平素口にしていた高橋であっただけに、病床を訪う度に、癌治療の絶望感と空虚感とに嘖(サイナ)まれ乍ら、闘志をかきたて病軀に鞭打ちつつ、最後のアルバイトを病院のベッドで物にして行った後姿が眼底に灼き付いていて離れず、悲愴という他に筆舌の法を知らない。

その魂の不屈、至純、高貴さ、哲学者としての理性と矜持を身を賭して実践した最後の二冊の労作が、その死の直前に上梓された事はせめてもの慰めとすべきかも知れないが、竹馬の友として願う事は誰しも同様で、もっと生きていて欲しかったという事だけである。例を挙げるならば、若し、新しい弁証法の樹立という命題が世界のあら

ゆる哲学者の担うべき焦眉の課題であるとするならば、高橋にもっと研究を続けさせてやりたかったと願うのは、至極当然であるし、故人もおそらくそうありたかったであろうと考えれば、志半ばにして逝った旧友の心情を惟うと、痛惜というべきか流涕無きを如何ともし難い。気比丸船上、従容と浪間に沈んで行った「若き哲学徒」の姿と故人の壮烈な姿とが、何故かダブって想い浮ぶのである。惜しみても猶余りありと諦め切れないのが偽りのない処である。

私は与したくないのだが、その反論として、高橋は高橋らしく、人生に対する達観を持し、哲学者として人間として、鞏固に長くその一生を一筋に立派に生き抜いたのだ、否、むしろその熱と、意気と、純情との、不逞とも云うべき魂が生命を縮めたのではなくして、逆に労作を終える迄、ずっと病弱であった生命をむしろ引き伸ばしてきたのだ、という解釈をなす人も現れよう。

三木清氏も述べておられるように、

「執着する何物もないと云った虚無の心では人間はなかなか死ねないのではないか。執着するものがあるから死に切れないという事は、執着するものがあるから死ねるという事である。深く執着するものがある者は死後自分の帰ってゆくべき処を持っている。それだから死に対する準備というのは、どこまでも執着するものを作るという事である」

との事であるから、或はこの説が正しいとするならば、故人以って安らかに瞑すべしという事になるのであろうか！

然らば、哲学者らしく生き、哲学者らしく死ねた事が、常日頃、衰鬢に至って未だに蹉蛇の行を繰返す凡夫の私

にも、人間如何に生き、如何に死すべきか、再考させてみる緒(イトグチ)を友人の最後の直言として、少くとも投げ掛けて呉れた、とでも解すべきであろうか！

× × × ×

「下を向いていても春は来るよ。寂滅の笑が分るようになったらいゝよ」。之が大学時代の私の失恋に対する故人の慰めの科白である。一方、彼は自称「大脳の一小変化」によって、女子医学生だった令夫人との恋を天衣無縫まさしくおおらかにそれこそ万葉時代のそれの如く、私の目前で獲ち得た。後年、辛辣な警句を以って鳴る或る友人の所謂「髪結の亭主」と「ソクラテスの妻」という奇妙なカップルが誕生した出合の場である。

その頃は京の下宿に屯(クムロ)して、ポール・ヴァレリーだとかドストエフスキイが何だかんだと世俗を超越したようなつもりで、毎日のように焼酎やどぶろくを呻り乍ら一緒に居たので、故人のハッスル振りが微笑しく想い出される。その頃読んでいたレールモントフの文章に出て来る「看護婦」という言葉が痛く故人のお気に召し「看護婦」に代って「女医」が自分について呉れると御満悦で、私もよく誘れて令夫人の実家に一緒に遊びに行ったものであった。若き日の令夫人の瞳がキラキラと輝いていたのが印象的だったし、決って美しい星空を仰ぎ乍ら余韻を味いつつ夜遅く下宿へ帰って来たものだった。

ショパンに執着する私にモーツァルトの良さを熱心に説き、モーツァルトの世界に耳を開かせて呉れたのもその頃であったろうか。序でに云うと、故人はベートーヴェンは聾だから八釜しくて叶わないとも云った。私は失恋が永遠の狩人としての自分自身を太くして呉れたような気になって、せっせと腰折の詩を作っては故人の感想を強要していた。北白川から京極へ出るのに五円の市電賃を払うのが惜しくて歩く程に物質的には貧しかったが、云わば

真夜中の虹のような佳き時代のひとこまである。

×　×　×　×

我々は若い時から故人と共に時折、仲間同士でよく小旅行をした。各地の古寺に古仏を探り、白浜、播州東二見、須磨浦へ水泳に出掛けた事もあったし、自然の風物と歴史の中に身を委ねるべく、熊野・熱海・箱根・奥琵琶湖など。逆富士を眺める為に富士五湖を廻ったのが昭和五七年春……之が高橋との旅行の最後になって了った。いつもの事乍ら往還の車中や旅舎で酒を酌み乍ら駄弁りあった事は、例によって例の如く青臭いというべきか他愛のない書生談義か冗談に終始したものだったが、それでも時にはおのがじし生活に根差した生々しい、時にはギラギラした話題を熱っぽく語り合う事もあった。唯、お互い、何の忖度も要らず心の紐を緩め放しで思いのたけを語り合えるのが無性に嬉しくも楽しかった。そんな時、高橋は冗句を混え乍らも、概ね饒舌な程に話の中心になり、数々の話題を提供した。「お前、バッカだなあ」と宣(ノタ)まうのが、そういう場での故人の御機嫌頗る麗しき際の口癖乃至間投詞であった。

故人が語った成田空港反対闘争から逃げ帰って来た学生達を官憲から庇った話、入試問題の出題に就いてのエピソード等は、興味深く印象に残ったし、何よりも高橋が哲学研究者としてだけではなく、愚昧の者を見捨てるでなく、嗤侮するのでもなく、真の教育者として学生達に対する学問への厳しさと並存した、深い思い遣りと泥臭いと云える程迄の強烈な愛着とを共存させていたという点に、更めて敬意と感銘とを新たにしたものである。

×　×　×　×

まだ学生時代の頃、故人が「誰しもが何故哲学者になろうとしないのだろうか不思議で仕方がない」と真面目臭

って云い出し、何を思い上った事を云うのかとひとしきり仲間で大論争を展開した事があった。高橋の学問に対する生まじめさ故の発言だったと解して頂ければ良いのであるが、一旦、学問を離れての高橋のひととなりは一口に申上げて、周囲の人々への思いもやらぬ程に細やかな気配りと心遣りとに満ち満ちたものであった。そうして、稚気横溢、奇矯に振舞い勝ちな親しい友人達の中にあって、最たる常識人であり、世俗の所謂しきたりなどにも不思議な程に通暁していた。稍もすれば偏狭になり易い学者の中にあっても、故人は真に常識のある人だったであろう。最も正しい意味の常識においてである。だから世間的な何等かの交渉事が起れば、仲間の先頭に立つリーダーでもあった。万事に誠実で、就職やその他の事で友人や後輩に暖かい手を差し伸べる男でもあった。

高校時代に高橋の家にはよく友人達が集まり御母堂始め御姉妹達のお世話になったし、大学時代の彼の下宿にはいつも誰かが遊びに来ていた。換言すれば、誰しもがもっと高橋と一緒に時間を過したいという気持を抑える事が出来なかったとでも云うべきであろうか！　彼は友人に恵れていたというのではなくして、私のみならず他の人達が高橋という素晴しい友人に恵れた事をむしろ感謝すべしと申すべきであったろう。

事実、呑兵衛飲助で、誰とでもつきあいが良かったし、この豊かな抱擁力と高邁無比の真摯なつきあいの仕方、懐が広いというか人間的な奥行の深さというものがどこから出て来ているのだろう？　こんな事では何時勉強するんだろうと人事ならず、ふと思う事も数少くはなかったが、意志の強固な故人は飲酒日を決めていて、あとは大学教授になってからも徹夜に近いような仕事を続けていた模様である。

煙草にしても、昔から絶対に禁煙しないと云い切っていたが、肺癌手術の成功後の病室でさえも、癌は癌と割り切っていて、逆に私を病院の喫煙室へ誘い出したのだから懼れ入る他はない。自分の欲する儘、自分の信じる儘に

思索に自分の生を賭して、哲学者として力の限り生き、身をもって哲学する事が如何なるものか無言の裡に示したのだから、本人としては案外悔は無かったのかも知れないとも思うようになった今日此頃である。

だから故人の死を深く悲しみ感傷に耽るのは故人の好む処でもあるまい、とも思い直してみている。何故なら昔習ったように、所詮、フィロゾフィーレンとは真理とロゴスを求めてパトスが迸る事であると定義づけるならば、生の全体を貫いて真理を求めて熄まない生命の燃焼を、高橋は哲学者らしく既にやってのけたと云えるからである。

× × × ×

故人の訃報を受取った朝、上海行の出張で航空機に乗り込もうとする寸前であった。通夜、そして葬儀、荆妻に代理参列させる一方、異郷にあってそれら予定時間には東の空に向って自づと黙禱を捧げるのみであったが、日々の出張の要件を終える毎に、毎夜、旅宿の一室に籠っていると、この得難い友人を失ったこの寂寥感はいつになれば果てるのであろうか、否、時間の経過につれ失ったものへの心残りが益々脹れ上ってゆき、悲しみが愈々深まってゆくのであった。痛恨の極みに繰言は最早無用……中国に滞在していた影響か故人を悼む愛惜が漢詩となったので、御披露申上げて、このぢぢむさい拙い文の結びとさせて頂く。

孤燭悵然疎二俚唄一
管鮑友去終不レ回
有情却無四十年
暫待酬酬二黄泉杯一

合掌

一九八五年五月八日記

思い出すままに

伊　達　恭　子
（ジャパンエンバ株式会社常務取締役）

高橋先生と父〔故伊達四郎教授……編集者注〕の出会いは昭和二十年五月、父が天野貞祐先生のお招きで旧制甲南高等学校に赴任したときにはじまります。戦争も末期の様相をおびた頃空襲をうけて父は住吉村の職員寮へようやく二度目にたどりつくことができました。学徒は戦場に、工場に動員されていたので、一しょに工場へいったり、広野の開墾地へおもむいたりしました。高橋さんはこの頃の生徒のお一人でした。

八月十五日敗戦。二学期から講義ははじまりましたが、十月病に倒れて父は京都へ帰ってきましたので、甲南で講義をしたのはほんの数回だったようです。半年足らずの在職でしたが甲南の方達は京大へ進まれるとよくお見舞に訪ねて下さいました。

「〝哲学とは天下の大道である……〟先生はこうおっしゃって一息つかれ、しばらくして話だされるとあとは……先生の講義を聴いて哲学をしようと心に決めました」。後年よく高橋さんはおっしゃいました。

昭和二十四年ようやく病快方にむかった父は澤瀉先生のおはからいにより、松田道雄先生の診断書づきで阪大へ勤めることになりました。〃ようやくこれまでになれたのもたくさんの師友のおかげです〃と甲南の同僚の室田先生に父は便りをしていますが、戦後の混乱期に奇蹟的に命をながらえることができたのも天野貞祐先生はじめ多くの方達のはげましと援助によるものでした。

父は昭和二十五年高橋さんが京大を卒業されると助手に招きました。父の健康のこともあってかそれから他へうつられることもなく高橋さんは長い助手時代を送られました。その間にはいろいろのことがありましたが、父は「高橋がよくしてくれる」と感謝していたようです。

昭和三十七年四月二十九日、田辺元先生の訃報がもたらされました。文学部十周年記念論叢の論文〃Kritik から Dialektik へ〃に対して田辺先生から丁寧なお便りを頂戴し、それを納得して読みながら次の論文の展開と抱負を話していただけに父は大変ショックで、いてもたってもいられない気持だったようです。健康を保持するために阪大と家の往復の他は散歩もできるだけひかえてエネルギーの消耗を防ごうとしていた頃でしたので群馬の地はあまりにも遠すぎました。一晩まんじりともしなかった父のところへ高橋さんが訪ねてみえました。「先生のお気持はよくわかります。先生の名代として私を行かせてください」と頼むようにおっしゃり、父も心からよろしくとお願いして高橋さんは群馬へ急がれました。「伊達先生の名代でまいりました。何なりと申しつけて下さい」とおっしゃって田辺先生の告別式でこまごまと動かれたとのことでした。後日父が京大の先輩の先生から「伊達君はいい弟子をもって幸せだ」とうらやましがられたとききました。

昭和四十三年三月退官した父はもう二冊程本を書きたいし書かねばならないといい、そのためには健康であらね

ばとひたすら養生につとめておりましたが秋頃からは好きなものも咽喉を通らなくなりました。大学紛争たけなわの四十四年一月「毎日の新聞はきちんと残しておくように、元気になったら読むから」といっていましたが二十二日この世に別れを告げました。どんなにか仕事をしおえなかったことが無念だったでしょう。しかし晩年はこれでよいのだと心からそう思っていたようです。今はの際とも知らずオレンジをしぼりながら、お父さんが二年間健康で本が書けるなら私の五年、いや十年の命を縮めてもいいと思い、ひたすら祈ったのは父の子として私だけではありますまい。終生お世話になりました松田道雄先生にみとられ静かに旅立ちました。高橋さんは「本当に大切な人を失くしました。私はこれからどうしたらよろしいか……御家族には御迷惑かも知れませんがじっと寝ていられても生きていてほしかった。先生の年まで私は生きられるかどうか」涙にくれてポツリとおっしゃるのに、「そんなことありませんよ、父の分まで長生きして下さい」と申したのもついこの間のことのような気がいたします。

母は寄贈してもよいと思っていた父の蔵書のうち洋書を特別図書費で購入してくださるようおはからいいただきました。紛争のとき一冊でも失くしてはとのお心遣いから目立たないように滑車を使って窓から下へ次々に本をおろして全部を避難させたというお話も伺いました。

高橋さんが教授になられたとの知らせに母は大変喜び、父の遺影に「お父さん、高橋さんが教授になられましたよ。本当によかったですね。御両親にも申し訳がたって……」と報告していました。高橋さんが哲学されることを御父上はお許しにならず御母上のおはからいで京大の哲学科へお入りになった経緯があるだけに、父は「高橋を一人前にしなければ」と常々思っていたようでした。

父の命日に近い日曜日には、高橋さん、大野篤一郎さん、里見さん、浅野さん、志水さん達が毎年のように黒谷

の家へ集まって下さいました。母はその一日が楽しいようでした。お酒がはいる程に父のありし日のエピソードに話がはずみます。高橋先生は話してはうなづかれながら本当に楽しそうにしていらっしゃいました。父の前で一年間の報告をされ、一年の区切りをつけられる、そのような感じさえいたしました。「いきづまると必ず先生だったらどのように考えられるだろうか。そう思いながら進めています」ともおっしゃっていました。

デュッセルドルフで世界哲学会が開催されたとき、志水紀代子さんと同室できるということで御一緒させていただきました。おかげさまでいろいろの方ともお知合いになれてそれは楽しい旅でした。夜お酒が入ると父の想い出話をなさらないことはありませんでした。時折お疲れの様子もみえて、プラハではお城への石畳の坂道がお苦しそうでした。その頃から少しずつお悪かったのでしょうか。

昭和五十八年一月、皆様で黒谷へお集まりいただいたときは、高橋先生は何時もよりお疲れの御様子で八時前には「もう失礼しよう」と御自分からおっしゃいました。浅野さんが「珍しいね。何時もの高橋先生らしくないね」と首をかしげていられましたが、そのあとしばらくして倒れられようとは思いもよりませんでした。

阪大病院へお見舞に伺ったとき、たんたんと語られる言葉の中に限られた命を最大限に生きぬこうとされているのがひしひしと感じられました。

昭和五十九年にいただいたお年賀は印刷されたものの横に〝もう疲れました〟と乱れた字で書かれていて、父の晩年と思いあわせて暗くなる思いでした。高橋先生が御自分でおっしゃったように、まさかこんなに早く父の歳よりも早く逝かれようとは思いもよりませんでした。

父は「なんでこんなに早くきてしもうたんや」といっているでしょうか。それとも二人で時を忘れて哲学談義に

花を咲かせているでしょうか。

どうか安らかにゆっくりおやすみ下さい。

（京都大学法学部図書室）

兄の教え

髙橋光雄

兄昭二は六甲山系甲山（かぶとやま）のふもと夙川の満池谷墓地に安らかに眠っている。兄にとって生きるということは実に厳しいことであったと思うが、生と死との境を越えることは、さらに過酷なことであったと思う。私は弟として、また医師として、最後まで燃焼しようとした彼の意志に対して何ほどのこともできなかったこと、最後の苦痛を柔らげることすらもできなかったことを、彼が身をもって教えてくれた最後の命題として、いつまでも背負ってゆかねばならぬと思っている。

私は兄から数々の教えと便宜をうけた。なかでも夙川に住んでいた時代は、私どもが最も親しく接した時であり、また兄にとって青春の最高潮の時期であった。私どもは昭和十八年、これまで住んでいた西宮市鳴尾村から、夙川相生町の谷崎潤一郎が住んだことのある家（根津家）に転宅した。父は工学技師で、日本電子工業ＫＫという日本

の医用電子機器製造のパイオニヤ的な会社を経営していたが、哲学を志ざす兄は、父の反対を押し切って甲南高校文科、京大哲学科へ進学した。毎日深夜まで数冊のカントの分厚い原書を前にコツコツと勉強していた兄の姿がくっきりと想い出される。一方では野球が好きであった兄は、私を小学校の代表チームのピッチャー兼四番バッターに育てあげた。対外試合にもコーチとして一緒に遠征してくれたこともあった。父と三人で阪神タイガースの残念試合をよくみにいったものであるが、今日この頃の優勝フィーバーをなんとか伝えてやりたいとつい涙がでてくる。昭和二十三年、兄と入れ替りで私は甲南学園（中学）に入学したが、兄が残してくれていた足跡は大であった。この頃は父の会社が倒産し、我が家は火の車であったが、兄は自分の乏しい財布から〝チボー家の人々〟の初版訳本のはじめの数巻を私に買い与えてくれたことがある。彼は友人を大切にし、ことに甲南高校時代の親友がよく我家を訪れて、酒をくみかわして論議していたことが想い出される。当時夙川は多くの緑の丘陵と池があり、〝夙川〟の堤みや満池谷は兄がよくたどった美しい散歩コースであった。昭和二十九年我が家は市内今津に転宅した。翌年私は阪大入学となるが、ここでも兄はすでに阪大教官として私を迎えてくれることになった。

兄は私に対して常に優しかったが、時には決定的ともいえるほど厳しい態度をとったことがある。これは彼の生きることに対する厳しい姿勢から思わずこぼれてきたものであろう。私はいたらぬ者であるが、彼によってようやくここまで歩んでこれた様に思う。これからも彼の与えた命題を直視して、一歩一歩進んでゆきたいと念ずる。

合掌。

（大阪大学医学部講師）

高橋昭二先生への手紙

坂本　博

拝啓

その後いかがお過ごしでしょうか。私のほうは何とかやっています。この夏は昨年以上の酷暑で、「信州の夏」も名ばかりでした。こちらに来てもう十五年になりますが、こんな暑さは初めてです。いつもの年であれば日が西山（県外の人は「北アルプス」と呼んでいますが）に落ちると、ひんやりした空気が家の中にそれと感じられるほど素早く入って来たものですが、今年はそれが真夜中に繰り下がってしまいました。

あれはいつでしたか、確か私が松本に住むようになった年が明けて、最初の夏が訪れたときのことだったと記憶しています。先生は論文執筆のために二週間余り松本郊外の山中に在る扉温泉に滞在されたことがありましたね。その間に彰君がやって来て、三人で美ヶ原に登りましたが、そのとき私は不思議なことに気づきました。北アルプスは松本平から眺めている限り、それほど高くは見えません。当地に来て初めて北アルプスを見たとき、私は期待外れだと思ったほどですから。しかしあのとき、美ヶ原を目指して登って行くうちに、私は後ろを振り返る度に、常念を始めとする峰々がどんどん高くなっていくのを見たのです。その後これは私にとって良い教訓になりました。

その彰君は今はロンドンで修業中だそうですし、扉温泉の山の中で先生に甲虫を見つけていただいた私の子供た

ちも東京に出てしまって、今は家内とネコと三人（？）暮らしです。家内のことにつきましては大変御心配をおかけ致しましたが、どういう風の吹き回しでしょうか、医者が「ドラマティック」と驚くほど回復致しました。何よりも先ずこの朗報を先生にお伝え致します。

先生に最後にお会いしたのはいつでしたか。あれは二年前の（詰まりこの世の数えかたによると）昭和五十八年の九月一日だったと思います。あの日は防災の日だったのに、ＫＡＬのジェット旅客機の墜落事件で終日テレビは大騒ぎでしたね。今ではあの事件は「スパイ」の疑いがかなり濃厚になっていると私個人は受け取っていますが、先生もあのときはそんな推理を組み立てようとしていましたね――大脳の手術が数日後に迫っているというのに、よくもまあ（！）そんなどうでも良いことに一生懸命になって。

あの日私が豊中のお宅を訪れたのは奥様の御連絡によるものであったことは先生の既にお見通しのところだったと信じています。なにしろ医者を含め周囲の人々が先生の病気を「ガンではない」かのようにふるまっていたのに、先生は既に早い時点で真実がその逆であることを認識されていたほどですから。しかし周囲の人々が「ガンではない」かのようにふるまったとき、貴方自身もそのようにふるまったということに、私は他者に対する先生の優しさを感じずにはいられないのです――私自身も長い間その優しさに包まれていたことを思えば。

その上、貴方はガンに食われようとしていたのに、ガンを食らおうとまでしましたね。「ガンというものは果たして病気と言えるだろうか。これは生命に内在している生命の側面ではないだろうか」という意味のことを貴方はおっしゃいました（後で頂戴した『若きヘーゲルにおける媒介の思想 (上)』の「はしがき」を読んで、私は未だ美ケ原登山の教訓を生かすことが出来なかった自分を恥じたのですが）。私は「ガンというのは生命の自爆装置のよ

うな気がします」と答えました。

その時は神戸大学の水野和久教授も既に先生の正面のソファに腰を下ろしていたように記憶しています。私が久し振りに信州の山奥からやって来たものですから、旧友の彼を私の気がつかない間に電話で呼び寄せて下さったのでしたね。こうして三人揃うと、何やらえらくat homeな雰囲気になってしまい、先生自ら台所からビールにコップ、それにおつまみまで運んで来て下さって、私どもは大いに恐縮したものでした。そして三人でガンについて、生命について、また非合理的なものについて長時間それぞれが思うところを率直に交換したものでした——あるときは同意し、あるときは反対しながら。今振り返ってみると、「すさまじい」の一語に尽きると思わざるを得ません。

「肺が半分なくなってしまったから、空気を絞り出さないと声にならないんだよ」とおっしゃりながら、それでもずいぶん長い間私たちの相手をして下さいました。「大脳の手術が成功しても、意識が戻らないと困るなあ」という言葉、また「まだやり残している仕事があるんだけれどね」という言葉が今でも私の耳の奥にこびり着いています。

先生の手術後私はしばらく節煙を試みましたが、やがて元の木阿弥に戻ってしまいました。私は一体何で死ぬことになるのか、これは「神のみぞ知る」でありますが、どうも今の有様では肺ガンを死因とすることになりそうです。そのときは、昭二先生、私は貴方があの日私に身をもってそれとなく教えて下さった生き方を生きるべく努めることに致しましょう。

昭和六十年九月二十五日

敬具

追伸　今年は阪神タイガースが優勝しそうですね。

高橋昭二先生の思い出

春名純人
（信州大学教養部助教授）

一昨年（一九八三年）の四月三〇日（土）に先輩の関山和夫さんと共に豊中市民病院に高橋先生をお見舞した。ベッドの上に座っておられた先生と、短い時間であったが久方振りの語らいの一時を過し、そんなに難しいご病気ではないようなご説明と印象を受けて安堵の念を憶え、よもや、これがお会いする最後の機会になるなどとは夢想だにしなかった。

その後、先生のご病気が肺癌であったこと、また、それが転移して阪大病院で脳手術を受けられたことに聞き及び、驚愕動顛した。同時に、先生がご病床にあって寸暇を惜しんでご研究のまとめのために文字通り懸命のご努力を傾注しておられることを伺い、先生の哲学者としての誠実な生き方に、身の引きしまるような敬意を憶えると共に、なお、心からご快癒を願っていたのである。

しかし、ご病気の真相と経過を詳しく知ることができたのは、ご逝去のほぼ一週間前に出版社より直接届けられ

た先生のご著書の「はしがき」によってであった。『若きヘーゲルにおける媒介の思想 (上)』のこの短かい「はしがき」において、学者として哲学に身を捧げてきた喜び、病いに対する哲学者としての深い分析、人間としての当然の怖れや動揺、医師や同僚に対する感謝と配慮、ご研究の完成に対する希望、未完に終る予感と無念の思いなどが、鋭い知性とこまやかな感情と抑制の利いた強い意志の力によって人の心を打つ文章となって、思索と存在の統一された哲学者の凄絶な生き方を示している。今日の標準から言えば、誠に若くしてご逝去になられたわけであり、右の著も未完に終ったのであるが、先生は本物の哲学者としてその生涯を完うされたのだと思いたい。

顧みれば、この十数年、お会いすることも殆ど無くなっていたが、学部・大学院学生、助手として過した筆者の阪大時代、学問においては言うに及ばず、公私にわたって本当にお世話になった。筆者の就職問題が起った時に、先生が示して下さったこまやかで行き届いたご配慮を想い起こして胸を熱くしている。学生たちを心から愛し、また学生たちに心から慕われた先生であった。

先生のご家族がまだ西宮にご両親と共に住んでおられた頃、大学院の学生であった筆者は、同じく大学院の学生であった先輩の大野篤一郎さんと一緒に、お宅に伺い、ハイデッガーの *Vom Wesen des Grundes* であったかを読んで頂いて、あまりの熱心さに圧倒されてつい夜遅くなり、結局、泊めて頂いたことなども懐かしい想い出である。

先生が何もかもが貧しかったあの戦後の混乱期から、三十年以上に亘って文字通り寝食を忘れ、心血を注いで育成された阪大の哲学哲学史第二講座が、今後、その厳密な学風と誠実な学問的伝統を受け継いで、里見先生を中心にいよいよ発展していくことを願っています。

(関西学院大学社会学部教授)

在りし日の高橋先生

浅野遼二

文学部の三年生になった若葉の頃、京都黒谷の伊達四郎先生の御宅に伺った。病床に臥せりがちだった先生は、ポツリポツリと学生時代の話をしてくださったあと、

「ぼくは体が弱いから、君らの世話は何もしてやれない。そのかわり、高橋先生に何でも相談にのっていただきなさい」、と寂しそうに言われた。

伊達先生の言葉を素直に受けとり、また高橋先生の親身な御好意に甘えて、自由な雰囲気の中で学生時代を過した折の、若き日の高橋先生を回想してみたいと思います。

伊達先生の厳格さがよく響きわたっていたせいか、全くの就職難のせいか、土地柄のせいからなのか、哲学哲学史第二講座には、長い間、進学する者がいなかったので、研究室では話し合う適当な相手もなく孤立した感じでした。ですから、大学構内や駅への人混みの中で、少しうつ向き加減にゆっくり歩く癖のある高橋先生の姿を見かけると、内心ホッとしたものですが、そうかと言って何を話してよいのかわからず、傍らで黙っていると、

「ついて来るか」、と小声で言われ、夕方であれば大抵、豊中の飲み屋か、奥様の仕事場（診察室）の隣りの部屋で、酒盛りになるのがお決まりのコースでした。

当時、高橋診療所には、大学や専攻分野を問わず、多彩な顔ぶれの若い人が、毎夜のように、自然に集まり、威声のいい意見がとびかい、酒が進めば、面白い替え歌がでたりして活気に満ちていました。

小学生だった御長男の彰君が、先生の耳許で何かささやいていたり、つぎつぎにやって来る患者さんの忙しい診察の合い間を縫い、奥様が手際よく酒肴をこしらえてくださったり、まだ頬の赤い若い看護婦さんが酒の燗をみてくれたり、家庭的で居心地のよい場所でしたので、ツイ長居をしてしまうのが常でした。

酒には自信のある私も、そのうちに酔いが気持よくまわり、周囲が白っぽく薄れていく視界の中に、冬であれば、湯気の立つ鍋の向うに、夏であれば、カッター・シャツの袖を折りまげ、ふさふさした長めの髪をかきあげ、相好崩して酒盃を唇にもっていく、若々しい先生の顔が、揺れ動くいろんな人のあいだで、見え隠れしていました。やがて、物音に眼を覚ますと――かなり酒は入っていたのですが、またどこかへ出かけ、先生の御宅に泊りこんでしまったのです――、先生はすでに起床され、窓を開け放った朝の冷気の中で爽快に勉強したあと、ひと風呂浴び、朝食の用意をしておられたのです。何とも気恥しい想いをしながら、早々に退散し、下宿に戻りもう一度寝床に、頭からもぐり込んだものでした。

この時期、高橋先生は大学での講義や演習を済まされ、夜更まで若い人を相手に、哲学や政治上の問題について激しく議論し、したたか酒を酌みかわしても酔いつぶれることは少なく、意志堅固にもう一度起き直し、「カント研究」に打ち込んでおられたのでした。カントの苦斗時代のように、「教壇という鉄敷に坐って重いハンマーをふるって」、小柄で痩せた身を刻むように、論文作成に精励しておられたのですが、外からは、そのような気配は全く感じられませんでした。

そんな日々が繰り返され、数年経った二月のある日、研究室で先生がショルダー・バックの中から、束にした原稿を無雑作に取り出され、軽い調子で、

「読んでみるか」、と言われました。

手に取ると、ズシリと重い感触があり、二百字詰めの横書きの原稿用紙に、『カント批判前期の哲学』と題名が書かれ、題紙をめくると、少し長めの柔らかい特徴のある先生の書体が、ギッシリと並んでいるのが眼に入りました。

ひと区切り読んで、顔をあげると、先生は疲れた表情に、長い歳月をかけた大作を仕上げた喜びの感情を隠すように、煙草をくゆらして照れていました。

その夜は大阪にしてはずい分寒かったと記憶していますが、二人の酒量は相当だったようです。どこかの路地で、先生から

「帰れるのか」、と言われ、

「大丈夫です。帰れます」、と答えた別れ際、先生は殊更説教するでも気負うふうもなく、

「飲んでも遊んでもいいから、自分の勉強だけはしろよ」、と他人事のように言われ、酔いを残したままの足取りで、街灯の向うの闇に消えていきました。

わけへだてすることなく、若い人を育てることに心をくだき、ひとりひとりの人間の生き方を見守り、それと気づかれないように配慮されていた先生の気持が、冬の夜の寒気の中で、じかに伝わってくるようでした。

〈いい先生にめぐり会えた〉という熱い想いがしました。高橋先生はまだ三十代でした。季節が変っても人は変

らず、単調で静かな学生生活は永遠に続くかと思われた頃のことでした。

女と哲学

志水紀代子
（大阪大学医療技術短期大学部助教授）

「わたしはカントはきらいですね。カントをなさるなら、もっとほかに適切な方が一ぱいいらっしゃるでしょう。」

私が『道徳形而上学の基礎づけ』をやりたいと伊達先生に申し上げた時、「それなら高橋君に相談してごらん。カント学者として超一流だから」と言われ、喜び勇んでお部屋をおたずねした時に、開口一番言われたのがこの言葉であった。読んでおられた原書を前に、あからさまに中断されたことに対する不快感を漂わせながらこう言われた時、思わず涙がこぼれそうになった。今からもう二十年以上も前のことである。

私は六十年安保の年に入学した所謂「六十年安保」の世代である。この年に大学に入学した事は私にとって大きかった。後で述べる通り、個人的事情もあったが、安保後の挫折感が哲学へむかわせる大きな動機づけになった事は事実である。それにしても当時としては、実に奇異に見られた選択ではあった。「女に哲学は向かない」と一般

に考えられていた時代である。阪大の哲学哲学史第二講座（ドイツ哲学）には、まだ女性の先輩が一人も在籍していなかった。

女であることに引け目を感じながら、又どこかでそれに反撥しながら私が選んだのが哲学であった。それ以外に自分の選ぶ道はなく、文字通り自分の生きる場を求めておずおずと哲学の扉を叩いたのである。

伊達先生は温かく迎えて下さった。「女であることを忘れて勉強しなさい」と仰言った。それはスタートラインにおいて男も女もないという平等観であり、又やりたいという気持を対等に認めて下さったことであり、その時の嬉しさと安堵感は実に大きかった。

それに反して高橋先生は厳しかった。にこりともしないで「わたしが教養（課程）で教えていたら、哲学に来ることをやめさせたんですがね」と吐き棄てるように仰言った。

私がこの全く対照的な二人の先生に出会えた事は運命的ですらあった。私は伊達先生に迎え入れて頂き、文字通り高橋先生に鍛えられたといえる。

「女であることを忘れて勉強しなくちゃならない」と仰言った伊達先生のお言葉が、今も耳許に響くような気がするが、この様に言える伊達先生のお人柄そのものが、まさにカントの人間性を如実に物語っていたと言えば言いすぎになるだろうか。「ぼくはカントのグルントレーグング（『道徳形而上学の基礎づけ』）が大好きでね。もう幾度も読み返していますよ」と、少し鼻にこもる独特の語り口でにこやかに仰言った時、私は迷わずそこからカントに入っていった。伊達先生の哲学については『別離の論理』（伊達四郎遺作集　誠信書房　一九七〇年）の最後の箇所で、高橋先生が、その多彩な著作・論文が大きく「弁証法の歴史的・批判的研究」のテーマに包括されるこ

と、そして西洋哲学史の研究分野ですぐれた独創的な研究業績をあげられた事等見事にまとめて紹介しておられるが、私は初めてお会いした時に頂いた抜き刷りの論文「Kritik から Dialektik へ」を読んだ時の衝撃を忘れることが出来ない。いまだ充分に読みこなす事が出来ないながら、懸命に読んでいくうちに「バロックの表現」という言葉に出合った。そして「有限のうちに無限が、個別のうちに全体が宿るという、論理的、形式論理的に矛盾することによって、力と生命は躍動する」という箇所がでてきた時にはわくわくして自分の内面の世界にパッとひかりが差したようであった。「矛盾することによって、生命は躍動する」という表現は驚きであった。そして「愛によるキリストの彼自身の運命との宥和、彼の十字架上の死（愛による受難）を介しての神と人間との宥和」等の言葉に出合った時の感動は大きかった。

私は幼い頃から日曜学校に通い、キリストの福音を教えられて育った。十八歳の時に、今から思えば「教会にけりをつけるために」受洗して、それを契機に教会を離れてしまった。教会を飛び出すことに罪の意識があり、自分に非があることを認めつつ、しかし教会ではもはや埒のあかない自分のその当時の切実な問題に、自分で解決の道を模索していくしかなかったのである。孤立無援であった。そこに一条の光が差し込み、否定的・弁証法的に神への道が開示されたのであった。この論文を頂いたことが、自分の人生の方向を決める事になったと言ってもおかしくない。

ところで高橋先生から冒頭にあげた一撃をくらったのはこうした時だった。一時かなり落ち込んでいたのも事実である。そんなことを知ってか知らずか、その後も先生の辛辣な語り口は変わらなかった。伊達先生が、「女を忘れて」と云われるのに対して、高橋先生は、どこまでも「女である」こと、そして「女以外の何ものでもない」

ということを思い知らせるかのように、女を疎んじられ、又皮肉たっぷりに貶された。最初は涙がこぼれたが、面とむかってあからさまに、又シニカルにこう悪口ばかり言われ続けていると、自ずと反撥し、対抗する気持が育ってくる。いつか「そうですよ。女ですよ。いけませんか？」と居直ってしまい、実際口に出してそう言うようになった頃には、上の息子が小学校へ行くようになっていた。それにしてもそうなるまでにはずい分紆余曲折があった。

私が学部に進学した当時、第一講座のフランス哲学の大学院に唯一人女性の先輩がおられたが、その方はドクター（博士課程）の間に結婚され、新婚間なしで単身フランスに留学された。ところが、研修中に病をえてやむなく帰国され、やがて、「女は母になるのが一番良いんです。まわり道をしてようやく知りました」と手紙に書いてこられた時、私は唯一の味方を失って、荒野で狼の群れの中に唯一人取り残された様な心細さを覚えて途方に暮れてしまった。

後年その方は、ダンナ様と一人娘を残して自らの生命を絶ってしまわれた。どんな深い内面世界をかかえておられたのか、ついに聞かせてもらえなかったが、留学される前に一度お宅にうかがった時、私にむかって次のように言われたことがあった。「あなたは高橋先生がいらっしゃるから幸せよ。高橋先生はご自身が色々苦労していらっしゃるからよく気のつく方よ。私もお声をかけて頂いてずい分勇気づけられたわ。」

その言葉は衝撃的だった。私はバレーボールのリーグ戦をまえに、連日の練習で真黒に日焼けした手にボールを抱えたまま、西日の差し込む枚方のお宅で、この言葉をあっという思いで聞いた日の事を今でもありありと思い出す。高橋先生がどんな方なのかよく分らないままびくびくしていた時に、はじめて先生を知る手懸りを与えられたのである。

バレーボールにまつわる忘れ難い思い出がもう一つある。

四年生の夏休み前に研究室に呼ばれて、「もうぼつぼつバレーボールをやめて卒論の準備にかからないと卒業できないよ」とお説教を頂いた時のことである。伊達先生にはもうとうに見離されていて、「勉強もロクにせんと遊んでばかりいて!!」と厳しく叱られた。しかし辞めることは出来なかった。下手クソばかりの集まりで四部から一部にあがってきたチームがはじめて一部でする試合が残っていた。私が辞めればエースが抜けることになる。誰か一人欠けても試合が出来なくなるそんなチームだった。一週間考えて、私は先生に手紙を書き、その手紙を持ってお宅を訪れた。チームの中で最後の責任を果たしたい。そのかわりリーグ戦が終ればすぐに取りかかること、もしそれで卒論が仕上がらなくても悔いは残しません、と。両膝に血水がたまり、それを抜きながら練習していて、「今無理をすると生涯後遺症に苦しむぞ」と医者に脅され、最悪の状態の中で決めたことだった。先生は手紙を読み終えると、怒声を覚悟して神妙に座していた私に、肩すかしをくわせるように一言「よくわかった」とおっしゃった。その一言はあたたかかった。思えばこの時はじめて私は高橋先生に出会ったように思う。私にとってそれはまさに「青春の出会い」であった。

先生が甲南高校（旧制）時代の恩師中嶋聰一氏の偲び草の中に書かれた文章は、次のように始まっている。

「人と人とが出会うと云う事は一体どう云う事でしょうか。人は単に運命的に出会わされるのでしょうか。それとも出会わされつつ、猶友を求め、そしてそれを会合にまで昂めてゆくのでしょうか。会合には単に受動的運命面のみならず、既に主体的な能動面が働いているのではないでしょうか。そして青春の会合とも云うべき会合があるのではないでしょうか。誠実な魂が永遠なものを求め、敏感な魂が共感にうち震えつつ Syn-philo-

sophieren する様な会合――人がそこで初めて自己の存在を受け取り、他者の存在を肯定し、相共に存在の根底に迫らんとする様な会合――この様な会合が青春の会合ではないでしょうか。そしてこの様な会合の前に別離が、運命としての死ですらも一体どれ程の意味を持ち得るでしょうか。永遠なる会合にあっては死者も亦、生者なのではないでしょうか。もとより会合は一回的、瞬間的なものではありますまい。会合をして会合たらしめるものは相共にする存在の肯定であり、又存在の相互限定であり、かくして会合の完成は一生を通じての、青春をこえての課題であると云われねばなりません。けれどもその会合が主体的会合であり、Syn-philosophieren である限りは死者も亦、生者としての会合の一主体ではないでしょうか。勿論その会合を完うするのは生者の義務であるとしても――。そして生者の任務の重きを思わざるを得ません。」（『樅の木』所収）

この一文は一九五七年（昭和三十二年）中嶋先生一周忌の頃に書かれているから、高橋先生が三十才の時である。この偲び草の中には伊達先生が寄せられた一文もあり、今は亡き両先生の誠実なお人柄がしのばれて感慨深い。

高橋先生はこの後続けて、さらに次の様に書いておられる。

「哲学は今迄別離の論理を説くに急でありました。けれども別離の根柢には既に会合の論理が働いていなければなりません。世俗を離れて一人、孤独と抽象の内に永遠を思う事の崇高なるは云うまでもありません。又この様な主体的別離とは異なり、死神の荒々しき手が若き命を連れ去る運命的別離の悲しき事も申すまでもありません。けれどもそれが崇高であり、悲しみであるのは既にその根柢に会合が別離の地盤として働いているからに外なりません。会合を忘れた崇高は狂者の崇高であり、会合の充実を忘れた悲しみは感傷的であります。ともあれ私達は会合をして会合たらしめねばなりません。青春の会合を永遠の会合たらしめねばなりません。

その時私達は狂者の崇高を超え、死者を生者たらしめ得るでありましょう。」（傍点筆者）

私は先生がお書きになったものの中で、一番よく先生をあらわしているこの一文が好きである。今この文章を読み返す時、私には先生の遺著となってしまった『若きヘーゲルにおける媒介の思想(上)』の中に脈打っているものがオーバーラップして見えてくる。こういう不遜な云い方を許して頂くなら、それはまさに高橋ヘーゲルの世界である。

いつか酔っておられた時に、この文中にある別離の論理は伊達先生に対する当て擦りなんだと仰言ったことがあった。滅多に伊達先生（の哲学）を悪く云われたことがないだけにこの言葉は印象的だった。「世俗を離れて一人孤独と抽象の内に永遠を思う事の崇高……か」と空んじてつぶやかれたその時のお姿を思い出す時、今更ながらに伊達・高橋という二人の偉大な哲学者の奇しき邂逅を、カントとヘーゲルのそれにおきかえて考えて見ざるをえなかった。それは宿命的であったとさえ云える。

高橋先生がお書きになった青春の会合とは、まさに御自身が伊達先生に出会われたその実感に裏うちされたものであったのだろう。そして又先生は、私たちに対してもそのような魂のうち震える出会いを期待しておられたのではなかろうか。御自身を伊達先生の「正」に対してどこまでも「反」の立場におきつつ……。もしも私が先生に「青春の出会い」をもつことができたのなら、それを永遠の会合に高めていく使命を負っていかねばならないだろう。そしてそれは生きている限り、先生との会合を弁証法的に続けていくことになるだろう。御冥福を心よりお祈りしつつ拙いペンを置かせて頂こうと思う。

（追手門学院大学文学部助教授）

思い出

マークエステル・スクアルチィアフィチ

私はShoji Takahashiの事を常に思い出すだろう。それは私だけでなく、彼と近づきになり知り合う機会のあった人なら誰でもそうだろうと思う。彼のことに思いを馳せると、私の心に広がるのは、明確なものであろうと漠然としたものであろうと数々の思い出である。それは私を取り巻く色彩、音楽、優しさ、そして充足のファランドールでもある。

私には彼の家の、絵画に囲まれたサロンに座わる彼が見えるが、私達は多様なテーマを思いつくままに語り合う。彼の奥深いインテリジェンスと大いなる卒直さが私を感嘆させる。沈黙も又心地良く、心をなごませた。私達は時折、Reikoに話を中断させられたが、彼女は台所で、最高に美味な料理の仕度で忙しくしていた。

小鳥がえさをついばむ程に小食だったShojiに対し、私は出来上がった御馳走を食人鬼のように貧り食った。自分の行為に恥しさを覚えつつも、私の大食漢ぶりが私の対話者にいかほどかの健康と活力を与えたような気がしたものだ。

北新地までの遠出の夜、〃北龍〃での夕食の事も言わないではおられない。明かるく照らされた通りをぶらつきながら、私達はとりわけ芸術、文明、私達二国間の類似性と相違性を話し合った。一緒に本を書こうという計画をさ

え立てたのではなかったか。

結局、運命が私達を引き離したが、私達は非常に近い所に居て、何らかの方法でいつの日か会えるだろう、そしてお互いに言うべきことが沢山でてくるだろうということが私にはわかるのだ。何故なら感情の力は決して死なないのだから。

彼の死と彼が我々の心に置いていった深い不在を認めるのは難しい。我々は彼にふさわしくあろう、そして我々の心の内に残る彼の素晴らしいイメージを優しく思い出そう。

（画家）

哲学者と現実

田畑　稔

私が学部へ上る折、豊中の叔父の家で先生にはじめてお会いした。叔父夫婦は先生と知合いだった。私は、たしかまだ詰襟の学生服を着て、かしこまって待っていたが、先生は少し遅れて坂本さん、浅野さんらと一緒に来られた。

学部へ入って私は自治会の活動をやっていたが、教官との連帯というのが当時の我々の方針だったせいもあり、

また先生も講師になったばかりで張切っておられたせいもあり、よく集会に来ていただいた。いつか改憲反対集会を持った際、「自分達がしっかり頑張らなかったために諸君に色々な努力を強いて申訳なく思う。どうか頑張ってほしい」という主旨の発言をされ、学生一同、感激したのを覚えている。自治会が中心になってやっていた「文学部祭」でも、先生の講演会を持ったことがある。先生は『精神現象学』の主と奴の弁証法を素材に、現代の歴史状況をスケッチされた。この講演要旨は浅野さんがまとめて『大阪大学新聞』に掲載された。

私は自治会や唯物論研究会などに熱中していたので、講義の方は随分サボッた。たまに顔を出して早速居眠りをしたので、もう出席しなくてもよい、と叱られたことがある。先生は予餞会のあとなど、学生達をつれて夜っぴいてお酒を飲んだ。ドイツ語混じりの哲学談義から「学内政治」上の色々な話まで果てることがなかった。最後は大勢で先生のお宅に泊めてもらうことになった。酩酊しながら「酔って勉強できない時はカントやヘーゲルの本をサスッて寝るんだ」などとおっしゃるのであった。学者の非日常的生活世界を垣間見た思いで、我々にとっては忘れることのできない体験であった。

私の卒業論文はフォイエルバッハの愛の概念をテーマにしたもので、有限―無限の実践的媒介という中心的論点のせいか、先生から過分なおほめをいただいた。ところが私は大学院の試験で不注意にもドイツ語をやさしい方の第二外国語で受験し、しかも点がよくなかったので、伊達・高橋両先生の尽力がなければ上にあがれないところだった。

博士課程に進んでから結婚することになり、先生御夫婦に仲人をお願いした。はじめての仲人ということであった。お祝いにアカデミー版の『キリスト教の本質』二巻本をくださった。当日式場で先生と一緒にモーニングに着

替える段になって、私はネクタイなど殆どしたことがなかったのでうまく結べない。先生が結んでくれることになったが、前からだと左右が逆でこれまたうまくいかない。遂に先生は私の背中に回って自分のネクタイを締める要領でやっとうまくいった。結婚式で先生からいただいたスピーチの中身は、私に対してはマルクス主義の理論的基礎の弱さを直視して余程の覚悟で頑張れということ、女房に対しては苦労を覚悟しておけということだったと思う。あとの方は即刻現実となったが、前の方は現在なお日暮れて道遠しの感がある。

新婚旅行から帰ってくると学園闘争が始まっていた。私にとっては、先生や先生を通して垣間見たアカデミズムとの、ハニー・ムーン時代の終焉であった。今まで右から批判的であった院生の多くが、日大や特に東大での動向と連動して突如左からの批判に変った。人間の気分や感情というものが、たった数日でガラリと変るものであることを体験できたのは貴重であった。私のように日常的に活動にたずさわっていた人間は、大なり小なり「乗り超え」られ、当惑し、適応を迫られたように思う。院協ストは七ヶ月ほどにもなった。この学園闘争は私にとって、良かれ悪しかれ一つの「歴史的体験」として、その後の思想活動の原点になった。

大学が「正常化」の方向で進んでいた頃、先生自身が守ると確言しておられた慣行を破棄し、私を含め三名をはずして助手人事がなされた。誠意を示すつもりか先生は私にお手紙まで下さった。私は報復人事、差別人事として異を唱えた。問題の性質上、身近な友人を含め殆ど誰からも積極的支持はもらえなかったし、肝心の私自身、この問題を「泥沼化」させるパトスもなかったが、先生に異を唱えたことそのことに関しては、当然のことをしたまでで、今でも後悔していない。

その後、いわゆるシニシズムの一時期が続いた。先生と会うのも億劫で、会っても嘲笑的＝自嘲的なものの言い

ようになるのである。シニカルであるということもまた一つの批判には相違ないが、肝心の批判主体も批判対象ももはや実体的堅固さを喪失してしまっているのである。先生の推薦で『理想』に論文を送り、稿料が八万円入って、早速パチンコ屋に行ったりした。随分アンバランスな精神状態であった。

先生に推薦していただき、丸山珪一さんの御尽力もあって富山大学に就職が決った時は、先生は本当に喜んで下さった。学者として落着くことを期待されたのだと思う。ところが私の方は自分の学者的あり方との内的葛藤をかえって尖鋭化させていた。

富山に五年ほど勤めたあと、私は研究会に専念することを決意し、そのむね先生にお話しした折には、随分驚かれたが、結局、新しい領域で頑張るよう励まして下さった。

大学はやめたものの、最初の一年間ほどは全ゆる意味でうまく行かず、私は失意のドン底にあった。そんな折、たまたま私の仕事場が先生のお宅の近くにあるので、通りでバッタリ顔を合わせた。私の方はそれこそ合わす顔もない思いであったが、近くの喫茶店に入り、芳しくない現状を少しお話しするハメになった。先生は「世界概念としての哲学」という方向で再出発しなさいと激励して下さった。非常勤講師の口もさがして下さった。色々あったので、さすがにこの時ばかりは先生というものの有難さが身にしみた。

間もなく私は、山本晴義先生や鷲田小彌太、笹田利光の両兄らと共に『季報唯物論研究』を刊行しはじめ、多くの方々の御援助もあり、やっと活動も軌道にのりはじめた。

そんなある日、通りで、カッター・シャツに灰色ズボン、下駄バキで首をかしげた先生のうしろ姿をふと見かけたことがある。随分老人風であったのに驚いた。ほどなく先生が入院されたという話を聞き、豊中市民病院にお見

舞いした。先生はヘーゲルなどを病室に持込みながら、熱があって本が読めないと嘆いておられた。

二度目に阪大病院へお見舞に行った時にはもう坊主頭になっておられた。驚嘆すべき詳細さで自分の病状や手術の経過を話されるのである。転移の部位がよかったので激痛があり早期治療ができたと、しきりに「幸運」を強調しておられた。生への意志を感じさすというより、淡々と人生の幕引きを実践しておられる風で、胸に迫るものがあった。私が固辞したにもかかわらず、エレベーターの所まで送って来て、椅子に腰かけて見送って下さった。私はエレベーターの中で「無神論者が一番困るのは誰かに感謝したいと思った時、感謝する相手がいないことだ」という林達夫の言葉をふと思い出した。

三度目に叔母と一緒にお見舞した時にはもう面会謝絶になっていた。引き返そうと思っていると先生は一分間だけ会うということだった。目を開けているのもつらそうだった。私が先生から頂いた本のお礼を言うと「二冊……」と言って再び目を閉じられた。

先生がなくなられた時の私の感懐は「これで僕の気分も随分老け込むな」というものであった。現に今、このように波風なくもなかった先生との交通の一コマ一コマを想起してみても、感情の起伏は相当に平坦化したままである。何と言っても、現在的交通の中でこそ過去はその生彩を保つことができるのだ。ヤンガー・ジェネレーションの思想的営為は、直接には先生や先輩達との交通の中で学びつつこれらの人々を批判していくという形を取るほかないのであるから、もっと長く生き、もっと幅広く、もっとアクチュアルな哲学活動を展開していただきたかった。

先生は哲学史的哲学に徹してこられた。私もその点で先生の大きな影響を受けていることが最近段々わかってき

た。しかしホッブズの「世界絶滅」ではないが、あたかも哲学史などなかったかの如く「哲学史絶滅」し直接生活現場から方法的に出発するような哲学的営みもまた、必要なのではなかろうか。

先生は常に、哲学をやるものは必ず一つ、個別科学なり実践なり、レアールな領域を持っておかなければならない、と我々に言ってこられた。哲学専門家がどちらかと言えば意気銷沈し、哲学的に語る社会学者や心理学者や言語学者や人類学者が興味深い議論を展開している現状からみても、このアドバイスは全く適切であった。しかし哲学とレアールな領域との結合というこのモチーフは、先生御自身においても未解決の課題にとどまっているのではなかろうか。

哲学者の現実が大学教師的現実に益々収斂しつつあること、マクロに見ればこれは否めない傾向であろう。少くとも自分の中の哲学者部分がそういう事態を免れる条件は奈辺にあると先生は考えておられたのだろうか。

もちろん私自身、試行錯誤の連続である。しかしいずれこのような問いを先生にぶっつけてみたいと思っていた。つまり先生にもっと幅広い思想活動へ踏み切っていただこうと「挑発」する所存であった。そういう形で先生との新しい交通を持つことが私の願望であったし、少くとも部分的には可能であると思っていた。

私は先生にとり、強い意味で不肖の弟子であったように思う。しかし不思議と距離を置いた交通であった。先生も私を自分の「力（マハト）」の内部に置いているという気持ちになられたことは一度もなかったのじゃないかと思う。そのせいか色々面倒や心配をおかけしながら、面と向って叱られることも殆どなかった。私は私で先生と訣別するようなラディカールなパトスに欠けていたが、先生は先生で私を見限るということもなされなかった。

（『季報唯物論研究』編集長）

カント的厳粛主義

近藤良樹

大学紛争の頃、先生のお供をして或るスナックに行ったことがあった。僕は、当時飲酒に好感を持っていなかったので、そこでもジュースぐらいを頂いたのではなかったかと思う。その後も先生と飲酒の機会があっても、かなり、かたくなにおことわりしていた。

ところが、修士論文を書き終えて少々不眠気味になり困っていたら、先生から「そんなのは簡単なこと、酒を飲めばいい」と助言を頂き、ためしてみると、実にこれがよくきくのであった。そのためしばらくウイスキーのミニチュアびんを携帯するようになり、眠りにくい時などは、それを水で割って（正確には、水の中に数滴たらして）コップ一杯飲み泥酔して安眠するのであった。

その後、助手にして頂き、先生のお供をして、のめない酒を飲むようになったのであるが、その頃までは、カント学者としての先生が『実践理性批判』は演習ではやらないとくりかえして言明されていたのを、カントの冷酷な理性主義が veritas in vino（酒中に真あり）と合わないからだろうと、ごく安易に理解していた。ところが、何年も助手をつとめているうちに、しばしば先生が驚くほど（自身に対して）厳粛主義者としてふるまわれるのを見て、むしろ先生がカントと一致していて、カントの中に似姿を見ておられる点もあるのではないか、その故に、やらな

いと言われているのではないかとも思うようになった。

激怒の感情をいだかせるようなことを我々は、特に紛争の中で、平気でやった。先生をつらぬいていた根本気分としてのメランコリーと身体の不調（ぜんそく・胃病）は、多分に感情の余裕のなさをもたらして、まわりから見ても「これは先生を悩ませるぞ」と思われるようなことがあると、その翌日、助手室においでになって「一睡もできなかった」とよくいわれた。ところが、一睡もさせないほどに激怒させた者（当然、僕を含む）に対して先生は、その感情を一切エポケーして事を処されることがしばしばあったのである。

もちろん事がおだやかに展開しないこともあったし、先生自身の激情に対する自己制御も万全とはいえなかったのであるけれども、先生の内面（感情等）を知れば知るほど、「よくもあれだけ」と驚くほど厳しく自己を抑圧して、公正にふるまおうと努力しておられたのである。

カントが感性を信用しえず理性的厳粛（冷酷）主義に立ったのは、パトグラフィーの知見に従うならば、その分裂病質に由来するのであるが、先生の場合は、その点に関していうと、それとは反対の、人間味・人情味にあふれた循環気質の極に立っておられたといってよいであろう。ただし、その人情味は豊かすぎ激しすぎて、これを自己の理性魂で厳しく粛清して行かざるをえない点で、カントと同様の厳粛主義を採られるということになっていたのだろうと思う。先生をして時には自虐的にならざるをえないようにしたのは、実に、周囲の我々の責任に他ならなかったのであって、悔まれることが多々思い出されることである。

助手をさせて頂いていた間、毎月曜のように（時には木曜も）お酒のお供をしていたが、七年前、佐賀に移ってからは、はじめの僕にもどり、飲酒の機会は年何回かのみとなった。それでも不眠気味の夜は、先生の御助言に従

って、いわゆる寝酒をすることにしている。量は、かつてとはちがって、ウイスキーになおしてポケットびんぐらいになっているが、それでもこれまできかなかったことはなく、ありがたい薬だと思っている。

厳粛主義の方、講座制ではないので学生との付き合いは深くならず激怒するようなことはないが、家ではそうはいかず、激怒をぐっとおさえて先生のようにふるまうことは、僕には仲々できることではない。であればこそ厳粛主義を採るように努めなくてはならないと、先生が「一睡もできなかったヨ」といわれた時のことを思い出しながら考えるこの頃である。

（佐賀大学教育学部助教授）

高橋先生の思い出

山本博史

先生の思い出をこれほど早く書くことになることなど、一体誰が想像しえただろうか。肺を手術されて間もない頃、小泉君と二人で、先生に勧めていただいたカッシーラーの翻訳のことで病室をお訪ねした時、先生がベッドから余りにも元気よく、まるで何事もなかったかのように起きられ、二人のためにお茶を入れてくださる様子を見て、驚くと同時に安心していたのに……。

昭和五十年の春に教養から学部に上がった時、それが高橋先生との初めての出会いでした。研究室でのガイダンスで、誰の何を研究するつもりなのかを、先生に尋ねられた時、先生が超一流のカント学者であることを、私は、うかつにも知りませんでした。しかし、知らなかったからこそ、カントの『純粋理性批判』を研究しますと、恐らく大した問題意識も持たずに臆面もなく言い切ることができたのかも知れません。それ以来、先生のもとでカントを研究することになりました。とはいえ、それは先生の度重なる励ましのお蔭でした。卒論の中間発表の時は、私がそれまでほとんど講義に出席していなかったことをまるで忘れでもしたかのように――先生はそういったことも決してお忘れにはなりませんでしたが――懇切丁寧に指導して下さいました。私が先生にお酒を飲みに連れていっていただいたのは、この日が最初でした。修論の時は、口頭試問の後、わざわざ下宿に電話を下さり、先生のお手もとにもほとんど残っていなかった御著書『カントの弁証論』を下さいました。また私の拙い論文の原稿にはいつも目を通して下さり、ある時など一枚の紙にびっしりとご意見・ご感想を書いて下さいました。こういったことの一つ一つがどれほど私の励みになったかは、言葉ではとても言い表せません。

高橋先生は私にとって怖い存在でした。いつだったか、そのことを先生に申し上げますと、「べつに取って食う訳じゃないだろう」と笑っておられましたが、やはり怖かった。今にして思えば、それは、文字通り原書の一字一句を、そればかりか、単数形と複数形との違いやダッシュまでも丁寧に読まなければならないという、先生の学問に対する厳しい態度に由来するものだったと思います。勉強不足や考えの浅薄さを指摘されるのではとの思いが先に立ち、とうとうお尋ねすることができなかったことが、今では私の胸の内に空しく横たわっています。後悔先に立たずとはこのことか。

確かに先生は怖かった。それは、学問・研究に対する厳しい態度を私達学生に要求されたからでしょう。しかしそれは、学生一人ひとりが一人前の学者になれるようにと願う、先生の学生に対する愛情であったような気がします。先生は、「知っていることはすべて教えるから、またそれを利用してもいいから、論文を書け」と常々おっしゃっていましたが、教育者としての先生の私達学生に対する愛情は、とりわけこの言葉に凝縮されていたのではないかと思います。もちろん、それ以外の面でも、またどれほど些細なことであろうとも、先生は常に愛情をもって学生に接しておられました。それは、学生と激しい口論をすることになった場合でも、決して変わることはありませんでした。

阪大病院を退院されてからしばらく経った夏のある日、私は先生の御自宅を訪問しました。その時、先生は私に、胃癌のために死亡した私の父親のことを尋ねられました。私は尋ねられるがままに答えはしましたが、不吉な予感のする何とも重苦しいひとときでした。先生は冷蔵庫からビールの小瓶を持ってこられ、私に勧めてくださるのですが、しばらくの間私は飲むのをためらいました。飲める雰囲気ではなかったのです。すると先生は「僕も飲むから君も飲め」と言ってビールを飲まれたのです。私はグラスに口をつけました。余りにも、余りにも苦いビールでした。先生のお宅を後にしてからも、「まるで別れの杯みたいじゃないか」との思いが何度も浮かび上がり、悲しくなってしまいました。(もっとも先生御自身は全くそうは思っておられなかったかも知れませんが……)。とうとうこれが先生と一緒に飲んだ最後のビールになってしまったのです。

先生は不合理なことを聞くと、ウィスキーのグラスをテーブルに打ちつけて「なんで。なんでや」と憤慨されるのが常でしたが、また冗談でご自分と阪神タイガースの監督との交換トレードを希望されていましたが、先生の

ご研究を不合理にも断絶させ、また阪神タイガースの二十一年ぶりの優勝の喜びを先生に味わわせなかった女神アナンケーを目の前に座らせて、大声で怒鳴りつけたい。「なんでや。そんな必然性があるか。許せない。」

（追手門学院大学文学部講師）

高橋先生をしのんで

伊東道生

「しのんで」と書きながら、この言葉を前に妙に違和感を覚える。今でも先生が亡くなられたことが、まるでテレビか新聞のニュースで伝えられてきた平板な情報のようにしか考えられない。亡くなられてもう二年にならんとしているのに、「死」が事実としてあり、わかってはいるけど身をもった実感が湧いてこない。そう、先生は療養を兼ねてドイツ留学に行っておられ、もう少したてば帰ってこられまた……私の中ではこんな気持ちが、現実をうけとめるのを拒否するかの如く続いている。生々しすぎるのでもない、さりとていろいろなことを思い出して、それを情熱をこめて綴るなんてできそうもない、現在形でも過去形でもない感情が宙に浮いて漂っている。

私が先生の講義を初めて受けたのは、まだ教養部の学生時代だった。講義の前の誰でも覚える、少々の緊張感、一体どんな先生だろうかという好奇心。すると、教室の戸を開けて、片手をポケットに、片手で髪を掻きあげなが

ら、私の目にはさっそうと先生が現れた時の模様はありありと眼前に浮かんでくる。先生の講義はできあがった原稿をもって、それを読みあげるというのではなく、その場で講義をしつつまとめあげていくものだった。その講義を学生の一人がノートし、次回に先生に渡すことになっていた。先生がされた講義の最後の年、私が丁度そのノートをとる役だった。先生にしてみれば随分いいかげんで乱暴なノートだったと思う。よく、「少しニュアンスが違うんだよ」とぼやいておられた。

それからしばらくして秋頃だったろうか。いつものように講義の後でお酒を飲みに連れていって下さった時のことだと思う。先生はふと、こうもらされた。「君のノートを見ていると自分が衰えていくのがよくわかる。半年たっても新しい事が何もなくて同じ事柄ばかりだ」と。自分が勉強したことのほんの僅かしか表に出せないし、一年で一行でも論文で新しい事柄を書くのは至難の技だ、というのが先生の口癖だったが、今思うと、その頃もう病魔に冒されつつあったのを自覚しながら、はがゆい思いをされていたのだったろうか。この年の講義は、「自己同一」という題で、先生の遺作となった『カントとヘーゲル』の巻頭論文に掲げられている。だから私はとくにこの論文を読むといつも、そうした先生の言葉とともにある種の感情がこみあげてくるのを禁じえない。

学問すべてそうかもしれないが、哲学にも文献的なものと人生論的なものという二つの大きな落とし穴があると思う。どちらにせよ落ちこむと大変だ。先の論文の冒頭で先生は、「自己同一という問題意識」を通じて個人的問題から哲学の普遍的問題へと形を変えた旨を述べておられるが、綿密な文献研究、哲学史研究が訓詁学に陥ることなく際どいところで現実と接点を持っているその妙に何度はっとする思いを覚えたことだろうか。先生がある言葉を言い直したり、別の言葉で置き換えると、哲学の抽象的な言葉が生身のイメージを備えた生きた言葉に変わった

り、逆に極めて卑俗に見えた事柄が普遍的問題になったり、哲学というエレメントの中で存分に動きまわる先生の言葉を前にたじたじとなったものだ。

ある講義で先生は、「私は哲学史家であって哲学者ではない」と謙遜されたことがあった。勿論、哲学者を自称する、つまらない人生論者と一線を画す意味でも言われたのだろうが、単に哲学史と人生論、現代的問題意識とのバランスに終らない高橋先生の「哲学」というものを、さだかではなくとも垣間見ることができたと言うのは不遜だろうか。けれど、それにしても学部時代からかぞえて七年足らず。私にはあまりに短すぎた。

（博士課程在籍）